



← 満開の桜と旧本館のあやなす妙味を堪能する人々(上)と、お花見シーズンの弦楽部ミニコンサート(下)

平成24年4月10日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

春爛漫。優美に枝をしならせ、ひときわ目映い旧本館前のしだれ桜。国の重要文化財である建物との取り合わせは、何とも言えぬ趣が醸し出されている。お花見シーズンにあわせ、旧本館の特別公開日を設けたが、多くの人々が、風情豊かなこの「魅入りスポット」の醍醐味を、十分満喫していたようであった。

春は、同時に、初々しい新入生を迎える季節でもある。今号は、同窓生や在校生から寄せられた意見をもとに、教育の場としての旧本館を追ってみたい。

旧本館での授業がなくなって32年

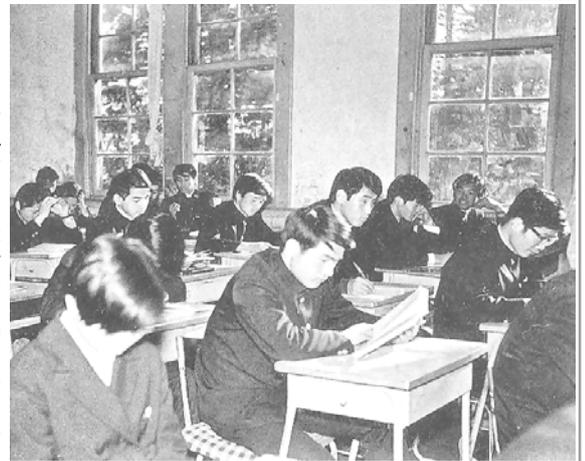
麗らかな春の陽光に映えわたる、見事な桜とシックな旧本館の調和の美。実に風雅で、心が癒される。この情景に魅せられてか、旧本館周辺では、どこからともなく現れ、ぎこちなさを漂わせながら散策する在校生が目につく。そのほとんどが新入生で、少し経つと、彼らが視線を定め、見遣るのはやはり旧本館校舎。旧本館は昭和51年2月3日に国の重要文化財に指定された。その後しばらくの間は、教室として普段の授業で使用されていたが、昭和55年4月30日をもって、竣工なった永久校舎(現在の本館校舎)に完全移転し、通常授業では使われなくなった。もちろんその後、生徒会活動や「一高祭」などで部分的には活用はされてきたが、通常授業の教室からはやや離れている場所に位置し、一般生徒にとっては、遠い存在になってしまったと言えるのかもしれない。

現在は、文化財保存の観点も加味されて定められた「使用心得」のもと、在校生では、吹奏楽部と弦楽部がふだんの活動の場として使用しているだけである。使用に際しては、本建造物が国の重要文化財であることに十分留意し、次の心得を遵守して大切に扱い、施設の保全に努めること。

- ドア・窓などの乱暴な開閉は絶対に行わないこと。
- 落書きや破損行為は絶対に行わないこと。
- 掲示物等は所定の場所を使用し、壁・柱等の施設にテープなどで貼付しないこと。

(9項目中の3項目を抜粋)

「旧本館使用心得」(昭和61年6月)



旧本館「復元教室」における授業風景
(1969年卒・21回生)

旧本館教室で学び、親しんだ世代

旧本館は、明治38(1905)年より昭和55(1980)年までの75年の長きにわたり、教室として使用された。ここで2万多名近くの同窓生が学び、巣立っていった。

その一人である渡辺良治氏(高21回・昭和44年卒)は「想えば、在校当時は、あの天井の高い本館校舎は自分にとって冷酷であった：何とも出口の無い苦しい日々であった」と、旧本館が、苦悩した日々の高校時代と重なり合う、と振り返る。だがその後、母校土浦一高に対するイメージが次第に変化していく。自らの結婚式の主賓挨拶で高校の恩師長壁英進先生が「高田保」(中12回卒・詳細は小紙18・20号)を取り上げたのを機に、高田の作品を探し求め、その過程で母校への距離が近くに感じられるようになっていったのだ。そして評論家紀田順一郎氏が、今、もっと読まれていい作家として彼を紹介したり、女優澤村貞子が、彼の脚本を絶賛したりしている

のに出会うと、妙に嬉しくなり、さらに文芸評論家小林秀雄が、病床に伏す彼に、幼なじみでもあるかのように「保っちゃん！」と泣かんばかりに回復を念じていたのも知った。そうした中で、素晴らしい先輩がいた「一高で学んだことを誇りに思わなかった自分が恥ずかしくなってきた」と述懐する。拝受したお手紙の概略は以上であるが、それと一緒に、今でも大事しているという写真が同封されていた。ほぼ30年前に、八坂神社への初詣の帰りに母校に立ち寄り、親類・家族と撮った記念写真である。



母校玄関前で(後列真ん中が渡辺氏)

現在の土浦一高校長武井秀一先生(高23回・昭和46年卒)からも、旧本館での授業にちなむ回想記を頂戴した。

「当時のこととしては、あの独特の臭い(防癌剤の油か?今でもする)」と、旧本館教室での授業風景が思い出される。高い天井であるため、先生の声が響き、格調高い講義内容と相まって、多くの恩師の声が耳に残っている。また、天井が高いので、夏は涼しかったが、冬は大変寒く(当時、教室にストーブは無かった)コートをもたないながら授業を受けた記憶がある。さらには、上下開閉式の窓のつくりは、明治期の建物ならではの土浦一高独特のものであり、非常に郷愁深い



本校に赴任当時の武井教諭（左端、現本校校長、1979年）

ものを感じる」と、生徒時代を追慕する。そして武井校長は、自らが若き教師として母校に赴任し、血気盛んに教鞭をとっていた頃も思い返される。

「現在の旧本館は、資料展示室と吹奏楽部と弦楽部の部室兼練習室になっているが、私が教員として転勤した時はまだ国語科と数学科の職員室（大職員室）に加え、普通教室としても使用されていた。前任校の境高校で異動辞令（現在は新任校）をいただき、旧正門を入ると櫻が満開であったのを、今でも鮮明に覚えている。旧本館校長室で当時の遠藤校長に赴任の挨拶をし、すぐに、大職員室で先生方に紹介された。旧本館は、着任してきた1年間は、授業で使用されたが、翌年の昭和55年3月末に現在の本館が竣工し、授業での使用は閉じられた。短い期間ではあったが、教師として旧本館で授業ができたことは、幸運であ

りうれしい限りであった。生徒の時は、先生の声が響いて格調高く感じたが、授業をする身になると、逆に声が響いてしまって喋りにくかったのが忘れがたい。その後、旧本館には生徒会室が置かれ、何年間か担当した「一高祭」の際には、生徒と幾度も議論したり、一緒に準備に当たったりした懐かしい思い出が詰まっている」と胸熱く顧みるものである。

学びの殿堂「旧本館」の保存と活用

以上は、旧本館が通常授業の教室に使用されていた往時を偲び、懐旧の念を混じえたものだが、その後の卒業生が心に留めている旧本館はどうであろうか。

現在の本校教諭小澤賢一氏（高37回・昭60年卒）は、「生徒在学中は、館内に入ったことはほとんどなく、あまり印象に残っていない。本校に赴任後、一般公開日の手伝いをするうちに、その価値に気付いたというところだ。生徒たちにはもっとその歴史に触れて欲しい」と、その思いを書面で届けてくれた。

同氏は、母校の教師として再び本校に戻って来られ、旧本館の価値を再認識する機会に恵まれたが、それはむしろ稀なケースと言えよう。大部分の卒業生にとっては、旧本館は、縁の薄いものか、場合によっては脳裏にさえあまり刻まれない状況なのかもしれない。

そこで旧本館活用委員会では、昨年11月に在校生（各学年1クラスずつ）に簡単な「旧本館に関するアンケート」を実施してみた。これに協力してくれたのは、1年生35名、2年生38名、3年生43名の合計116名であった。

質問の内容は右下の通りである。

- (1) あなたは今までに旧本館の中に入ったことはありますか？
- (2) あなたは本校の旧本館が国の重要文化財であることを知っていますか？
- (3) あなたは旧本館がロケ撮影等に使用されたTV番組を見たことがありますか？
- (4) 旧本館について、感想、提案、要望などがありましたら、自由に書いてください。

(1) について、「ある」と答えた生徒は、1年生34名(97%)、2年生14名(37%)、3年生25名(58%)であった。1年生がほぼ全員が入ったことがあると答えたのは、武井校長が「できれば、本校で学んだ生徒には、一度でいいから旧本館教室での授業を体験させてやりたい」という、心に秘めていた積年の想いを、早速「道徳」の授業という形で実現させたからにはほかならない。



旧本館「復元教室」で行われた武井校長の「道徳」授業（2011年11月）

2、3年生は、ほぼ2人に1人が「ない」と答えているが、その理由として、「関心がない」「時間が足りない」「入りづらい」等々をあげている。中には「入れることを知らなかった」という生徒もいた。(2) については、ほとんどの生徒

が知っていると答えており、貴重な建物であるとの認識は浸透しているようである。(3) については、「一度も見たことはない」という生徒が、1年生17名(49%)、2年生10名(26%)、3年生14名(33%)であった。(4) については、様々な意見が書かれていた。「明るい照明が欲しい」「冷暖房が欲しい」(文化財の維持管理という側面もあるが、現在、鋭意努力中と聞く)など、設備に関するものが大多数であった。「皆で掃除をし、一高の伝統を守りたい」とか、「他校の生徒から『一高の旧本館はきれいだ』と言われて嬉しかった」と、共感をそそることをあげてくれた生徒もいた。全体としては、明治期の建築技術の粋を尽くし、重厚なる佇まいが目を引く旧本館の建物を誇りに思い、大切にしていきたいという本校生の気概が感じられるアンケート結果であった。

最後に、現在の本校教諭関隆一氏から賜った一文(要旨)を紹介したい。「県東地区の学校で学び育った私は、旧本館の存在を知らなかった。2004年、会議で土浦一高を訪れた折に旧本館を偶然目にした。驚きと感動で、思わず息を飲んだ。その後、土浦一高に勤務することになった。赴任が決まったとき、最初に思い出したのは旧本館の厳かな姿であった。伝統ある本校のシンボルとして、これからも旧本館は、確かな存在感を放ち続けるものと確信している」と、荘厳なる威容と尽きない魅力を綴られている。言うまでもなく、旧本館は本校だけのものではなく国の宝物。この保存と活用の責任の重さに、私どもは、今更ながらに、身が引き締まるのを覚えるのだ。

A c a n t h u s

第46号

← 日本館前の3本の楠の巨木。緑の若葉に初夏の陽光がはじける(上) その楠を背にしたクラス写真(第19回生、1964年4月撮影)(下)

平成24年5月22日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会日本館活用委員会



桜花が過ぎると、冬眠していた樹々が一斉に新緑を芽吹き、青葉の匂いにいやされる皐月。校内でひときわ目をひくのは、日本館玄関前に鬱蒼と茂る楠の巨樹。立夏の陽光を受け、すっかり入れ替わった緑の葉が“キラキラ”と輝く。日本館が建設された際に5本の苗が植樹されたが、昭和初期に1本が欠け、平成に入ってまた1本が欠け、現在は3本だけが聳立する。日本館と同様に、よく記念写真の背景を飾るこの“クスノキ”について今号は取り上げてみたい。

日本館前のクスノキは樹齢100年

日本館前で美しい樹形をなす楠の大木。よく「樹齢何年ですか」と尋ねられるが、その時は、決まって「樹齢100年です」と答える。すると「えっ!」と驚きの声がおこる。「超極太の幹」を前に「500〜600年位…」と踏んでいたからに違いない。それほど想像を遥かに超えた早い成長のクスノキは、日本の巨木リストの多くを占めているのだ。

日本館前の大楠を仰ぎ見ると、天を突かんばかりに空に向かって躍動している。その壮大さには思わず息をのむ。また、巨樹ゆえに鬼気迫る存在感とともに、深厳なる雰囲気も漂わせる。その威容は、恰も日本館の守護神の立ち居であるかのごとく、靈妙な趣さえ醸し出している。そうした一方で、多くの同窓生にとっては、日本館とクスノキを背景にした記念写真が、お定まりとして長く撮られてきたこともあって、記憶の奥に留められ、高校時代の懐かしさとともに感慨入りの「記念樹」と言えなくもないのだ。



瑞々しい新緑、建物の桜色、空の青さ。3つがおりなす「皐月の美景」(上)、幹回り4.5mの大楠(下)

明治39(1906)年に苗木5本を植樹

記録によれば、日本館前のクスノキは明治39(1906)年秋、新地(現在の牛久市新地)の植木屋から、高野虎次郎・藤田賢哉両教師が5本の苗木を購入し植えたものである。それが、いつの頃から、1本がまず欠けてしまった。そして20年近く前までは、ずっと4本のままでその偉容を誇っていた。しかし平成に入ると、そのうちの一本の樹勢が衰え、平成6年頃に枯死し、伐採されてしまった。当時の職員は「伐採後しばらくの間は、切り株周辺から、タンスを開けた時の樟脳と、まさに同じ芳香に包まれていた。それは今でも鮮明に覚えている」と話す。4本がそびえ立つ状況は、最上段の48年前の「クラス写真」をみても一目瞭然だ。クスノキは、左端に幹の半分が見えるものも含め、4本がほぼ似たようなスケールで立ち並んでいる。これに対し、現在の状況を撮った最上段の上半分の写真や一段上右の全景写真では、3本だけが立っているに過ぎない。そして、その大きさや枝振りにも差が生じてきているのがわかる。

幹周りが最大のものは4.5m

今回、この3本の幹周りを計測してみた。校舎に最も近いものが4.5m。その次が2.5m。校舎から最も離れているものが4mであった。その太さの度合いにはかなりの差があったが、既述した通り、もともとは、日本館校舎新築の際に同時に植樹されたものである。

また近くに残る2つの切り株についても調べてみた。1つは楕円形を成し、

長径が1.5m。平成6年頃に伐採されたものであることを確認した。もう1つはほぼ真円形で直径0.5m。これこそ、最初に枯れてしまったものと推定され、他のクスノキの太さと比較・勘案すると、おそらく昭和初期に切り倒されたもの、と思量された。



平成6年頃に伐採された長径1.5mの切り株(上) 昭和初期の伐採とされる直径0.5mの切り株(左)

楠(クスノキ)はご神木にも仏像にも

クスノキは「楠」あるいは「樟」とも表記され、枝・葉など各部全体から樟脳の香りを発する常緑高木。この木の枝・葉を蒸留して得られる無色透明の個体が樟脳で、防虫剤や医薬品等に使用されている。カンフル注射のカンフルもこの樟脳を指しているのだ、という。これ以外にも、楠は四季を通じて大量の二酸化炭素を酸素に変え、さらには酵素カンファアールを放って夏の清涼感を生むとともに、抗癌能力を高めるといわれている。関東以西の暖地に分布し、人手の入らない森林では少なく、人里近くに多い。また公園・学校・神社仏閣などの各所に植樹され、土浦市内の川口運動公園では、陸上競技場から野球場の周囲にクスノ

キが植えられ、今ちようど見頃で、その青葉の美しいことはこの上もない。そうした一方で、神社林を構成する楠はしばしば大木にまで成長していく。その代表格が太宰府天満宮境内の52本のクスノキ「天神の森」。最大のものは幹周り11.7m、樹齢千年。国の天然記念物にも指定されている。また、神社のご神木として信仰の対象とされているところもある。さらに用途を探ると、防虫効果とともに、巨材であることを活かし、家具や飛鳥時代の仏像に利用された。また、虫害や腐敗に強く耐久性があることから、船の材料としても重宝されてきた。このように、人々の生活と密接に関わることで、古くから珍重されてきたクスノキ。そのためなのか、県木・市木等に指定している自治体は百近くもある。



日本館を覆うクスノキ。カンファアーを放し、夏には清涼感に癒される、という

「楠落葉」は五月の季語

ところで、楠は常緑樹だが、春の4月中旬から5月上旬にかけて新芽を吹きだすと、冬場に緑濃く蓄えていた昨年の葉を新旧交代とばかりに落とす。紅く染まった古い葉が、わずかの風にサラサラと優しい音を立てて舞うように降る。一週間から10日ほど続くその光景は、自

然の摂理が演出するファンタジックな世界そのもので、萌える緑色の若葉が春の陽光にまぶしく映える一方で、樹の下には黄色や茶色、あるいはすすけた緑色の落葉の絨毯が敷き詰められる。それゆえ、「楠落葉」という言葉は、古くから5月の季語になつていようである。



清掃当番泣かせの「クスノキ落葉」の絨毯 (通路も含め、樹の下は落葉ですべて覆い尽くされる)

その葉の量が、他の樹木と比べて格段に多いのにも驚かされる。それが大樹ともなれば、生半可ではない。本校でも、4本の大クスノキがそりたつ頃に、その清掃を5年間担当したという先生は、「週3回の清掃日は、毎回リヤカー数台分の落ち葉に悪戦苦闘しました。本当に清掃当番泣かせでした」と、振り返るたびに苦労話に花を咲かせる。

本校の場合、楠がもたらす負の側面はこれ以外にもあるようだ。例えば、巨樹ゆえに旧本館建物内を明るくする太陽光線が遮られ、室内を暗く感じさせたり、枝葉によって雨樋が詰まったり、さらには、折れた枝によって屋根瓦が破損する可能性が大きいこともあげられる。

以上のように、迷惑なことが多々見られるのも事実である。一方で、プラス面の効能や用途については、すでに言及しているが、それ以外でも、夏の「灼熱地獄」を緩和してくれる涼味あふれる木陰を提供してくれる点も見逃せない。また養老猛氏によれば、自然とのふれあいは脳を活性化するそう。そのため、楠木の幹を触っていると元気が出てきたり、そよそよと風に揺れる楠の葉の音を聞いていると心が静まったりする、という話もあるのだ。そうであるならば、学びの場としては最高の環境が整えられていたばかりでなく、森林浴のストレス解消効果と同じく、多くの人に至福のひとときを提供してくれていたと言える。

新築時には真鍋住民から苗木の寄贈

ちなみに旧本館前には、クスノキ以外にも多くの立木・草花が着生している。それらの中には「中学25回」「中学33回」「中学41回」の同窓生による記念植樹も含まれ、それを明記した標識が据えられている。これらは、母校愛と学窓への感謝の証であることは想像に難くない。考えてみれば、旧校舎が建設された際には、地元真鍋町で記念品を贈ることを思案し、各戸1本ずつの苗木を寄付することが決められた。これに共鳴し、寄付をした一人が、鈴木芳男氏(中26回卒・元本校事務長)の祖父鈴木松之助氏であった。松之助氏は梅の木を寄贈したが、後に芳男氏は、旧正門を入れて両側に植え込まれているどれかが我が家の寄贈ではなからうか、と述べている。また、この寄贈に関して、当時、県知事からは下段左下のような感謝状が授与され、鈴

木氏宅には長く保存されていると聞く。
茨城県新治郡真鍋町

鈴木 松之助

明治三十八年一月 茨城県立土浦中学校へ
樹木志株 寄附候 段奇特二候事

明治三十八年五月八日

茨城県知事正四位勲三等寺原長輝



地元真鍋町の鈴木松之助氏が寄付した梅の木がある旧正面スロープ

それにしても、現存する3本のクスノキは、真鍋校舎(現旧本館)が竣工した翌年に植樹されたもので、本校の「真鍋校舎108年の歩み」とほぼ軌を一にしている。その間、幾多の風雪に耐え、生徒達を泰然として見守り続けていることに、畏敬の念を抱くとともに、逞しい生命力やみなぎる荘厳さを感じ入る。

また、暑い季節を迎えるにあたり、校内各所に繁茂する樹々がもたらす、凜とした清々しさや涼感、爽快感に浴せるのは、数多くの先人達の善意と努力があったればこそ、と改めて思い返すのである。

追記「旧本館」テレビに BS朝日「建物遺産」

(金曜22:54)で6/1(金)・8(金)2週連続放送予定。満開の桜に彩られた国指定重要文化財日本館は4月10日撮影。気品溢れる風情美に期待。



← 平成24年6月2・3日開催の第65回「一高祭」テーマは『万華鏡』(案内パンフより)

← 若き命が躍動する学園祭や部活動。燃え盛った余韻はいつまでも忘れない。本校の揺籃期にサークル「茶話会」が度々催された明治期の「神龍寺本堂」

平成24年6月12日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

日々の生活からは想像できないほどの異彩を放し、絆を深め合う特別活動(行事・部活動等)。今年の「一高祭」も、多くの生徒にとって、汗だくの爽快感や、やり遂げた成就感に酔いしれ、記憶に残る“祭”になったに違いない。そもそも、本校の特別活動は明治30(1897)年の開校と同時に始まった。校舎さえない多事多難のなか、生徒達は積極果敢に挑み、年々活動を活発化させていった。今号から少し、草創期の本校の特別(課外)活動を辿ってみよう。

進修會(現在の「生徒会」)の発足

恩師先生の授業は忘れてしまっても、いつまでも忘れないのが特別活動(行事や部活動等の課外活動)に懸けた輝きの残像。それは、感動と興奮、挫折と希望、無念と歓喜、といった筋書きのない「熱きドラマ」に身を焦がし、完全燃焼の醍醐味を若い命に刻み込こんだからにほかならない。この特別活動について、今号は、本校の創立直後から発刊されてきた『進修』(明治33年1月「第1号」)と明治39年3月「第7号」を通して、探ってみよう。



神龍寺24世住職梅峰大和尚(戦前にあたる銅像)。旧土浦中学校第1回入学生で、開校間もない時期の特別活動に大いに尽力

明治30(1897)年に、茨城県尋常中学校土浦分校(学校長今井恒郎、分校主任畑勇吉)として産声を上げた本校は、土浦城内(現亀城公園)の新治郡役所2階などを借り受け、4月22日から授業を始めたが、同時に80名の第1回入学生達は、さっそく放課後の活動(特別活動)も始動させた。同好の士が野球などのサークルをつくったのだ。しかし、学校自体が借家住まいであったため、活動場所の確保は難儀をきわめた。そうした中で、出身地別、クラス別に集まる茶話会だけは、頻繁に回を重ねた。会場は市内の寺、特に文京町の神龍寺が多かった。それは、神龍寺が学校の近くであったばかりでなく、神龍寺23世住職の二男であった秋元梅峰氏(第1回入学生、後に

神龍寺24世住職、社会慈善活動に力を尽くすとともに、日本三大花火大会の一つとされる土浦全国花火競技大会の創始者)のほからいによるところが大きかったと考えられる。

開校から数ヶ月、学校生活が落ち着きを見せ始めていた頃、誕生していたサークルを取りまとめるべく、1回生の山口剛氏(後に早稲田大学教授、江戸文学者)、成井藤三郎氏、中山庄一郎氏(後に土浦中学教諭)らは駆けずり回った。その結果、明治30(1897)年(翌31年説も)12月3日に、諸グループが一同に会し、「進修會」を発足させた。そしてこの下に雑誌部・演説部・體(体)育部の三部を設け、組織として体裁を整えたのだ。



市指定史跡にもなっている山口剛先生の墓(土浦市・浄真寺)

三部の活動内容をみると、雑誌部は学術の研究知識の交換を目的とし、かつ本会一般の記録報道の機関たるものとし、毎学期1回雑誌『進修』を発刊して会員に配布する(事情により回数は増減できる)とある。演説部は知識の交換、弁舌の錬磨を目的としていた。體育部は、心膽(心胆)を錬磨し、身体を強健にするを目的とするとし、撃劍柔道科と野球遊技科に分かれていた。この二つをみると

生徒達の人気は野球に集中したらしく、「撃劍柔道科に要する稽古着竹刀類は、当分、数を定めて各級(各学年ごと)に配与す」となっていたのに対して、「野球遊技科に要するボールその他の器具は数を定めて各組(各組ごと)に配与す」となっていた。ただ、「器具の保管は幹事(担当教諭)之を掌る」とあるように、現在の部活動とは異なり、あらまし、放課後のレクレーション程度の活動であったと言えなくもない。

「進修」の名の由来とその運営

ところで「進修」の名は『易经』の「君子進徳修業」の語句からとったものである。つまり、進修會は、まさに生徒と教師が共に「進徳修業」を実践していくための組織として呱呱の声をあげたのだ。このことについて、進修會雑誌『進修』第一號序に筆を取られた水戸学の大家、名越時孝先生(1855〜1929。弘道館に学び、茨城師範学校教師・茨城中学校教師・慶応義塾講師などを経て、明治21(1888)年から10年間、徳川家の『水戸藩史料』編纂に従事。明治32年6月から明治41年3月まで土浦中学校教諭。その後水戸中学校教諭を勤めた)は、「土浦中学校において進修會が設立された。授業の余暇に、師弟が相い会して切磋琢磨し、武芸の技や演説の術を磨き、詩文を編んでいく。こうして剛健、進取の気を養っていくことこそ「進修」の名にふさわしいものであり、会員一人ひとりに学術の根幹を扶植することになる」と、その意義を強調されている。さらに会の設立と同時に、「進修會規約」も次のように制定されている。

目的

本会の目的は徳智體三育の趣旨に基づき文武の学芸を講究し兼ねて相互の交誼（こうぎ 友誼を促進する）にして以て当校の教養を輔翼（ほよく 補佐）し校風を懿美（いび うるわしく美しいもの）ならしむるにあり

役員

特別会員 当校職員

賛助員 元当校職員

通常会員 当校生徒

会長一名

当校主任教諭を推す

副会長一名

当校職員中より会長之を委嘱す

幹事若干名

当校職員中より会長之を委嘱す

委員若干名

通常会員（生徒）中より之を選定す

会計掛一名

当校職員中より会長之を委嘱す

任期は会長の外一年

役員

委員

会長ならびに各幹事の指揮を受け

各部の事務を掌る

特別会員

各自心分に寄付するものとする

通常会員

毎月（ただし八月を除く）金八銭

宛授業料と共に書記に納付する

（抜粋）

この規約にもとづき会長には分校主任畑勇吉先生が推挙され、副会長・幹事には各先生方が、会計掛には事務職員が委嘱された。生徒委員も山口剛氏をはじめ各部ごとに出選された。この生徒委員については、当初は生徒の互選によるものではなく、先生方の推薦を受けた者が任命されたようである（明治32年頃からは委員選挙が実施された）。また、企

画・運営では、雑誌『進修』の原稿や演説の内容は「學術の範囲内に於いてし政事問題等に渉ることを許さず」とあるように、先生方が『進修』の原稿を吟味し、会長の検閲を経て発刊したり、「演説の演題及び主旨をあらかじめ幹事の先生に差し出すべし」を徹底したりしていた。従って、自由な表現や発表あるいは生徒の自治などの考えは、教師側にも生徒側にも全くなかった。さらに財務担当の会計掛も職員が担当したように、現在の生徒会とは違い、運営は、学校や教師の監督のもとになされ、生徒達もそれを当然の事として受けとめていたようだ。

進修會主催の「運動會」は神立原で

「進修會」設立後、雑誌部・演説部・體育部、それぞれが活動を本格化させる一方で、進修會にとつて、最大の行事は運動會。明治31（1898）年には、春季運動會を6月19日に、秋季運動會を11月12、13日に、神立原で盛大に開催。神立原は、現在の神立中央から中神立町にかけての一带と考えられ、神立駅近くのバス停に「神立原」の名をとどめている。神立原では、翌年もまた、5月14日に第1回運動會を挙行した。このときの種目は、三年対二年の野球試合、400ヤード・障害物・二人三脚等の競走、綱引きなどであった。前年同様、新治郡長をはじめ、県南地区の名士や一般客が多数詰めかけ、地域の「一大祭典」の様相を呈していた。しかし、秋の運動會は開かれなかった。それは立田町に新校舎（現土浦二高）が竣工し、その移転準備に生徒も忙殺されていたのではないかと推測される。（同年12月21日には移転完了）



JR神立駅から歩 10 分「神立原」バス停。この帯は、明治 30 年代には「スポーツのメッカ」で、本校の運動會の会場となった。また第1回県下連合野球大会（現在の高校野球選手権大会）も開催された

翌明治33（1900）年4月1日になると、分校は、茨城県土浦中学校（初代校長福山義春、分校を龍ヶ崎町に設置）と改称し、独立に至る。あわせて渴望していた新校舎での授業も軌道に乗り始め、前途洋々、旭日昇天の空気に満ち溢れていたのは、容易に想像できる。そしてその年の第2回春季運動會は、校庭が未整備であったため、会場はまたまた神立原。初日の4月28日は二・三・四年学年対抗野球試合、翌29日は、一軍選手による三・四年対抗野球試合、撃剣の野試合、屋外の剣道試合、さらに運動會らしく400ヤード走なども行われた。福山校長も職員200ヤード競走に出場し、6位に入賞。その一方で、地域を挙げた大イベントには、柏田茨城県知事も来臨し、生徒の奮闘ぶりを観戦していた。同知事は4月18日にも来校し、授業の巡視や生徒への説話に時間をさいた。校舎創設と独立が同時に成り、教育活動の充実に一層弾みがつく土浦中学校に対し、県当局が大いに期待を寄せていたのが窺え知れる。《余話》神立原では、明治37（1904）年夏、土浦中（現土浦一高）、水戸中（現水戸一高）と龍ヶ崎中（現龍ヶ崎一高）の三校による、第1回県下連合野球大会（現在の高校野球選手権大会）が開かれた。大会に出場した水戸中の飛田穂洲は「各野球部とも費用に甚だ窮していた」と、後にその苦勞を語っている。

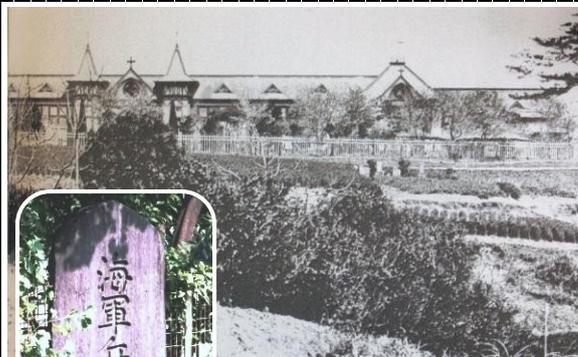
「ゲート」と「仮装行列」の始まり

明治34（1901）年には春季大運動會は5月17、18日に実施。会場が初めて自

らの校庭となつたうえに、中学校として5学年すべてが揃った年度。意気上がる生徒達は、この日を待ちかねるとともに心躍らせ、「ヤルぞー！」の気概が脈打ち、運動會に全精魂を傾ける。三年生は西門町（神龍寺付近）と鷹匠町（土浦警察署付近）の通用門に渾身のアーチをしつらえる。元祖「二高祭ゲート委員会」だ。また四・五年生有志は樂隊を編成し、祭典に彩りを添えようと必死に取り組む。午前6時。花火の打上げとともに、土浦町内の人々、真鍋小・土浦小の児童、龍ヶ崎分校の生徒など、多数の観客が押し寄せる。場内は混雑をきわめ、整理の警官が出動するほど。種目は陸上競技、野球、撃剣野試合など。勝者は音楽隊の演奏に合わせ、場内を周回する。パフォーマンスを披露する。またこの年には仮装行列が始めて登場。特に音楽にあわせた軽妙な仕草の七福神は大喝采を浴びた。仮装行列と言えば、明治37（1904）年5月の運動會では、日露戦争の戦闘シーンが演じられた。余りにもリアルな構成と迫真の演技に、まるで戦場を觀戦しているようだ」と評判になった。この仮装行列はその後土浦一高にも受け継がれ、体育祭の呼び物となっている。（次号に続く）



6. 370 人ももの来場者があつた今年の「一高祭」。入場受付ゲートには多数の人々が立ち並ぶ。ゲート内部は鮮やかな極彩色の『万華鏡』世界（左上）



← 真鍋の高台に燦然と聳え立つ校舎（現在の旧本館）（明治40年頃）。この地に移転すると、端艇を購入して水上運動会も開始（『むかしの写真土浦』より転載）

平成24年7月10日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



← 明治7（1874）年に、日本で最初の運動会が行われた東京・築地の海軍兵学校（海軍兵学校の前身）跡。「競闘遊戯会」と称したものであった

大きな行事として今も受け継がれている「一高祭」や「一高オリンピック」。その原点は草創期の土浦中学校「運動会」にまで遡る。運動会は、生徒同士の親睦・心身鍛錬を図るばかりでなく、地域の人々も観覧する一大祭典であった。そもそも日本で最初の運動会は、東京の海軍兵学校で実施された「競闘遊戯会」といわれる。その後、運動会は文部省令で薦められ、全国の学校に広まる。今号は、明治期の本校の特別活動について、「運動会」を中心に記してみたい。

日本独特の行事「運動会」の発祥

運動会の淵源を求めると、明治7（1874）年に、東京・築地の海軍兵学校（海軍兵学校の前身）で、英国人の指導で催された「競闘遊戯会」であるといわれる。また「運動会」の言葉が最初に使われたのは、明治16（1883）年における東京大学の「第1回競技運動会」であった。そして明治29（1896）年の文部省令で薦められると、全国の小中学校で運動会が実施されるようになり、地域社会の中心行事としての性格も持ち始める。

種目内容は、当初は競技会的な色合いが濃かったが、次第に、参観者の心を掴むべく、娯乐的レクリエーション的な色彩が強められていく。その結果として、より面白く、より興味を引く珍妙さを打ち出したり、世相を敏感に反映させたりする内容や演目が、拍手喝采を博すとともに、運動会の評判を高めていった。

「運動会」の利益金で校旗を作成

現在とは違った、こうした世情で世間の注目を集めつつ、土浦中学校の運動会は毎年開催。当時の人々にとっては、大きな楽しみの一つであり、地域の一大イベントであるため、そこには、町内はもとより近在からも多数の観客が訪れた。

明治36（1903）年秋の運動会は、4年生が中心となって開かれたが、売店の売り上げ利益が何と50円という大金に達した。そこで生徒達は校旗を寄付しようとした。年末に、優雅で気品と重厚感に満ちた立派な校旗が出来上がると、一時校長宅に保管し、明治37（1904）年1月1日、校旗捧呈（贈呈）式を執り行った。皇居遙拝式後、4年生は武装（軍事教練）

スタイルに身を固めて校長宅に赴き、校旗を受領。校旗を先頭に土浦町内を行進。立田校舎に至り、11時より全校生徒整列のもと、生徒代表の手から福山校長へ校旗が手渡された。寄贈された校旗は今も旧本館資料室で輝いている。



明治36（1903）年の運動会では、売り上げ利益50円（現在の約200万相当）。この大金で作成され、学校に寄贈された校旗。現在は旧本館資料室に展示される

真鍋台校舎に移ると水上運動会も

真鍋台に新校舎が完成。そのため明治38（1905）年3月5日に移転式を挙行し、学年末試験は新校舎で行われた。そして5月20・21日には「新築落成記念陸上大運動会」が催された。野球、撃剣、庭球、陸上競技、仮装など、従来通りの内容だったが、この時は、「記念絵はがき」も販売された。その一方で、売店係が本職のラムネ屋に販売を認めてしまうなど、生徒のやる気のなさが心なしか垣間見えて、いま一つ盛り上がりには欠けていたようだ。要因としては、生徒達の中に、慣れ親しんだ立田校舎が「海老茶式部（えびちやしきぶ）。紫は当時華族が用いる高貴な色で、そのままでは畏れ多いので、それに代わり海老茶色の女はかまが、女学生のスタイルとして定着していた。そこで女学生を紫式部にあやかり「海老茶式部」と呼んでいた）の襲う所となり」で、真鍋台の僻地に追いやられたとの悔しさが、相当に募っていたから、と考えられなくもない。

その後、真鍋台校舎の素晴らしさを実感した生徒達は、海老茶式部への怨みも消え、真鍋台の青春を謳歌し、陸上運動会に加えて水上運動会（端艇競漕会）も開始し、土浦中学校の名物行事に大成させていくのだ。

秋の運動会「ヒョットコ事件」

しかしその直前には、生徒達の盛り上がり冷や水をあびせる事件がおきた。明治39（1906）年10月6日、秋季陸上大運動会での「ヒョットコ事件」（小紙3号で詳述）だ。3年生が思案をめぐらし、満を持して登場させた余興の山車は「車上、酒樽を積堆、その上に某生徒の大江山酒呑童子。拍手喝采四方に起こり、実には我々をして、これ同じ学びの庭に通える生徒の仕業とはとても思えぬ」と大絶賛大人気。それゆえ、山車を返却する際も真鍋・土浦両町内で演技し、人々の喝采を浴びた。しかしこれが「されどこの巧妙なる余興が遂に社会の悪評を蒙り、且は教育界の大問題とまでならん」とは図らざる事なりけり」と、予想外の展開を招いてしまう。「野蛮で下品」「猥褻行為」「無届けデモ」等々、各方面から糾弾され、関係者の責任を問う声があがってきた。そのため10月29日、遣澤恒猪校長が依願免職し、秋田県立大館中学校長に転じ、3年担任の先生方も県外の学校に異



霧ヶ浦で端艇を漕ぐ。制帽・シャツ姿で乗艇の生徒

動する局勢となった。12月1日の送別会で、遣澤校長が「従来の事態より今回の事に至る真情を指示し、而も一毫の私情に及ぶなく、唯今回の辞任を以て将来一新の機を開き、以て全般の風規を振刷するを得ば、余の一身、万事を犠牲とするも余の満足する所なり」と一身に責めを負う覚悟を示すと、場内は「満場聳然（まんじょうしょうぜん。慎み恐れるさま）、寂として水を打ちたる如く、唯暗涙に沈めるの状あり」といった様相で、生徒達の落胆ぶりがうかがえる。12月2日、生徒職員全員が見送る中、遣澤校長は土浦駅を出立し大館に向かった。

校風刷新の嚆矢となる雪中行軍

同年11月27日、幸津國太郎校長が太田中学校長から土浦中学校長兼教諭に任じられ、12月20日に着任した。幸津校長は「学校の主役は生徒、生徒が変われば学校が変わる」との信念を心根に据え、早速、校風刷新・面目一新に向けて始動する。意気消沈した生徒達の志気を高めようと、機をうかがい策を練った。明けて明治40（1907）年2月7日、夜来の大雪。これこそ千載一遇のチャンスととらえた校長は、授業を急遽取りやめ、全校臨時雪中行軍を敢行すると指示。これに対し、生徒の歓声が各教室で湧きあがり、意気軒昂、すでに万里の外にまで駆け出しそうな勢いが漲る。水戸街道を北進し、中貫から稲吉村に至り、各学年入り乱れて大雪合戦。帰路は中貫から6000m競走。個人・団体学年対抗が行われ、個人1位は2年乙組大川延男、団体1位は3年、と記録には残される。さらに幸津校長は「将来執るべき方針に付き予め生徒父兄に告知し置くこと

必要」を感じ、2月16日に父兄懇話会を開催。154名の参加者に学校の将来像と父兄心得を説く中で、特に、創立10周年記念事業として端艇（短艇・ボート）建造の計画を明示し、父兄の理解を求めた。霞ヶ浦という他校にはない自然環境を生かし、生徒の志気と団結を高め、ひいては学校の活性化を図るにはボートが最適という思いを強く訴えたのだ。端艇部は、すでに明治34（1901）年に創部されており、翌年7月には5人乗り端艇「筑波」「霞」、和船「西施」「亀城」を購入。その翌々年6月には川口水神宮前を決勝点に端艇競漕会が行われていた。

創立10周年記念端艇建造の雄図

154名の父兄を前に、熱く語った同日の明治40（1907）年2月16日に、国津校長は、石村・小松崎・小田原・小泉各教諭を「端艇建造調査委員」に任命した。そして一気呵成に計画を推し進める。3月上旬の委員会報告を受け、同月12日に職員会議、同月19日に進修會評議員会で建造を可決。4月5日には「土浦中学校創立満10周年記念端艇建造趣意書」を配布し、遠近の有志に発起人を依頼。同月13日には第1回端艇建造発起人会を中城会議所で開催。この時は、賛否両論が噴出したが、校長はじめ先生方の熱誠と意気込みが伝わり、同月16日の第2回端艇建造発起人会では賛同を得て、事業計画が決定。寄付金は土浦・真鍋を中心に広く募ることになった。これに呼応し、校内では同月18日、平川・此田・石村・小松崎・小田原・高野・小泉・中山の各教諭を「端艇寄附募集委員」に任命した。委員を中心に東奔西走し、一般寄付金2100余円（575口）、

職員寄付金360余円、合計2500円近くの寄付金を調達した。この浄財をもって、端艇3隻新造（価格1050円、運搬費を含む、「筑波」「霞」「桜」と命名）、中古艇2隻購入（価格250円、「鹿島」「香取」と命名、練習艇とする）、さらに艇庫を価格600円で新設することとした（埋立、地ならし等一切の費用を含む）。艇庫の場所は、当初、川口川右岸が適地とされたが、土地埋立工事が非常に困難と判断され、川口水神宮手前の地（現ホテル観光付近）に変更した。塚越斧太郎氏の請負で艇庫建設はすぐに開始された。

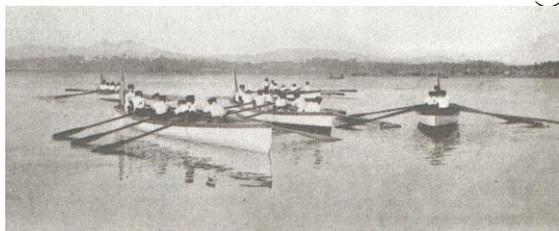


あ宮の中・真
に神居の（左写
川口の大正鳥湖
市水宮。とたし
浦現在。神の上
土（上）のあか
る神宮。とたし
土浦に『むかし』より

端艇については、10月4日には中古艇「香取」が到着したが、「鹿島」は未着。調査してみると破損を蒙り、佐原にあることが判明。尾崎楠馬（在職明治40年4月〜同44年7月、本校校歌作曲者）・小田原勇（在職明治39年11月〜同41年1月）両教諭（小紙22号で詳述）を直ちに派遣。すると破損は軽微とわかり、修繕の上、同月15日に川口に回航された。他方で新造艇は、霞ヶ浦の増水により艇庫建設が遅滞したままであるため、建造を請け負った東京浅草の野口庄吉氏に保管を依頼するよりなかった。

端艇の活用にあたっては、10月5日に五年生経験者を艇長に任命した。また尾崎教諭が漕法を教え、日々漕手を育成する一方で、小田原教諭が水上部長として、一切をマネジメントした。後年、このコンビは静岡県立見付中（現静岡県立磐田南高）に赴任し、創設期の学校づくりに多大な功績をあげられたのである。また「水上部端艇取扱ひ規則」も制定され、10月31日には、端艇建造委員会で「創立10周年記念式と端艇進水式」を12月1日に実施すると決した。創立記念日を4月22日とすることは、4月時点で確認されていて、端艇新造・艇庫完成を待つて式典を確定したのだ。

12月1日は「一天払うが如く晴日暖和、いささかも寒さを覚えず」という好天氣に恵まれ、10時より学校講堂で記念式典。12時30分から「海国男子」（真鍋町有志の寄付）の額が掲げられた川口艇庫前で進水式。5隻のボートが「萬衆歡呼喝采の間に勇ましく進水」。続いて新艇「筑波」「霞」「桜」による競漕レースが五回行われた。これこそが水上運動会の幕開けであった。（次号に続く）



水上運動会の幕開けとなる5隻の端艇。左遠方に筑波山（『むかしの写真土浦』より転載）

追記「旧本館」またもテレビ放映 B500テレビ「知られざる百年遺産わが町の建築物語」（火曜20:54）で7/24（火）予定。



「頼むぞ」の声援を受け、「いざ、出陣！」岸蹴り直前の水上運動会の選手達。湖岸は黒山の人(上、昭和4(1929)年)。ゴール目前に、必死の形相で最後の力漕(下、同年)

創立10周年記念事業として、明治40(1907)年に端艇5隻を建造。それは水上運動会(端艇競漕会)の端緒を開いていくものだった。端艇(ボート)競技は、すさまじい覇気と武勇の気魄をもって、漕手全ての一条乱れぬ動きと、調和のとれた漕力が勝負の鍵。そしてその一体感こそが競漕の醍醐味なのだ。

霞ヶ浦で展開された熱闘は、オリンピックの興奮を見るように人々に大きな感動を与え、地域の名物行事となっていく。今号は水上運動会を追ってみる。

『進修』に登場する水上運動会

本校の歴史を探ろうとすれば、いつも『進修』がその中心的資料となっている。その年度の行事や部活動等の状況が、生徒や教師によってつぶさに叙述されているからだ。明治33年(1900)1月にその第一号が創刊され、その後はほぼ毎年一回発刊されてきた。散逸した号数もあつたが、心ある方々からのご寄贈を得て、今では、そのほとんどを収蔵するまでに至っている。この『進修』を主なる史料とし、今号は水上運動会を辿ってみよう。

前号でふれたように、創立10周年記念事業として、新艇が建造され、艇庫も完成した。以降、ボートレース(端艇競漕)は一大行事となり、それに向けて、生徒達は一心不乱に取り組んでいく。

『進修』第12号(明治41年12月発行)によれば、同年の進修会掲示板には「勇壮なるボートを漕げ 汝海国男子よ 薫風やオール一瞥陽飛ぶ」との檄が貼られ、オールを握らざるものは亀城男子にあらずと、生徒達は日々漕艇を試みていった。整備された端艇の「筑波」「霞」「桜」「鹿島」「香取」はいずれも7人乗り。

『進修』では、7名のポジション(シート)名について、船首に近い方から、船手(じくしゅ)・二番・三番・四番・五番・整調(せいちょう)・舵手(だしゅ)と記している。「船手(Bow、バウ)」は、船首に最も近い漕手。漕手全員の方を向いているので、声をかけて士気を鼓舞したりアドバイスをしたりと、クルーをリードする役割も持ち、技術に長けた者がその任にあたるという。「二番・三番・四番・五番」はミドルクルー(Middle

Crew)と呼ばれ、船手と整調にはさまれた漕手で、船首に近い方は数字が小さい。エンジンルームとも呼ばれ、最も筋力や持久力のある選手が置かれる。「整調」(Stroke、ストローク)は船尾に最も近い漕手。全漕手からオールの動きが見えるので、整調のピッチが漕手全体のピッチを秩序立てていく役回りで、経験豊富な者が適任とされる。「舵手」(Cox、コックス)は最後尾で前向きに乗り、最短距離で航走できるように舵を取る選手。但し、舵を切ると水の抵抗が大きくなるので、各クルーが、左右バランスよく漕げるよう指示することが重要。その他、ピッチ(ペース)を考えてクルーに指示したり(舵手の指示は絶対である)、タイムを計ったり、漕手が力を100%発揮できるように心理面でリードしたりすることも求められる。それゆえコックスは艇長・作戦参謀・心理学者等の多様な側面を持った存在と言えよう。さらには陸に上がっても、イベントを入れたりして、クルーを引き締めつつ、盛り上げるのにも奮闘する「艇のリーダー」なのだ。加えて、少しでも重量を減らすため、小柄な者がうってつけとされている。

ボート競技の魅力

ところでボート競技は「スピード」を争うスポーツ。オールを持ち、艇を漕ぎ進め、他艇より少しでも先にゴールすれば勝ちという、まことに単純明快な競技。そして、レースに勝つためには、個々の高い力量が必要であるばかりでなく、クルー全体(乗艇メンバー)の「息」がぴったり合うことが何よりも大切。バラバラの漕ぎでは一人一人のパワーを生

かすことはできず、艇速(スピード)をアップすることは到底かなわない。それどころか、あらゆる方向に進み、あげくの果てには、沈没の憂き目を被ることもあるかもしれない。つまり、全員の呼吸・意識・動きの全てが揃った時に、初めて艇をトップスピードにまで加速でき、その迫力とスピード感は艇が空を飛んでいく感覚なのだという。もちろん、全員の研究が澄まされた集中力は絶対条件であり、その度合い次第で、2・3年の経験の差が埋められ、掴み所のない水が捕まえられるのだ。そのため、ボート競技は「究極の団体スポーツ」とも言われる。

一致団結して戦う一体感や連帯意識の高揚感、そして血たぎる充実感。さらには紫峰筑波を仰ぎつつ、四季の移り変わりを感ずる湖上で、自然と融合して思うがままに漕ぎ渡る爽快感は、「土中生」をボートの「とりこ」にしていった。

熱狂の水上運動会に多数の観客

前号で述べた第1回に続き、第2回水上運動会は翌明治41(1908)年11月に開催された。『進修』第12号(明治41年12月発行)には「薫風渡る頃より間断なく 練磨せしその腕いつかためさん、月明に遠漕せしその雄心いつか示さん」とあり、遠漕を試みて体力錬磨、不屈の精神を涵養し、待ちに待った生徒の様子が窺える。以下、往時の興奮・熱気がそのまま感じ取れるよう原文を活かしつつまとめたい。

天候も川口水神の御恵みか、快晴抜けるような秋空。午前7時30分、開催を告げる煙火一発蒼穹に響くや、五百の健児をはじめ観客が、艇庫前(川口港)に続々とつめかける。万国旗が風に翻り、



水上運動会メインレース「3・4・5年生学年対抗」(上, 昭和4年11月) ボート部の艇庫と部員 (明治44年10月) 最前列右より二人目が劇作家・随筆家高田保 (中12回卒)

はや選手の意気は天を衝くばかり。汽船3隻は、来賓と生徒の観覧船として、汽船善彌丸は審判係用として、それぞれ雇い入れ、午前10時にレース開始。

レースは9回。距離は750m。1・2年は各組対抗競漕。水戸中学選手の競漕や来賓・卒業生・職員混合の競漕も行われるが、何と言つてもメインは3・4・5年生による学年対抗レース。第3選手による競漕から始まり、第2選手、第1選手と、3回のレースが繰り広げられ、生徒の応援合戦はレースを追うことに熱を帯びていく。そして、最高のクライマックス第1選手ともなれば、出発点に向かうクルーに観覧船から「頼んだ」「しかりやれ」「4年、今度は勝て」などの声援を送る。選手達も「今に見よ」との覚悟でオールを握りしめ、日頃鍛えし鉄腕を振るうは今日と、勇みたちたる健児の面影、清き心は香澄の水か、高き気は筑波峰か、その華々しき漕ぎ振りでゴール

を目指す。4年(赤)先行追う、3年(青)、4年艇に迫り、5年(白)やや後より進む。観覧船に到るや声援の声、赤・白・青の旗の動揺、太鼓乱打の響き相和して狂せんばかり。3年応援隊は小舟に乗つての声援。満を持していた5年艇、一気にピッチをあげて3年・4年艇を抜き去り、4年艇を2艇身半引き離してゴール。5年万歳の歓声が観覧船の甲板上から湖上に響き渡る。タイムは3分37秒、4年艇は3秒、3年艇は8秒の遅れでゴール。優勝旗は5年の手に。太陽が西山に傾き、紫雲夕日を浴びて金光を放つなか、優勝クルーが5隻に分乗、艦隊運動を行い、野も山も町も蒼然たる暮色につつまれる頃5隻は艇庫内に収められ、ボートレースは終止符をうつ。

翌年の第3回水上運動会(10月17日開催)では、第3選手・第2選手ともに最下位であった4年生艇が、第1選手レースで雪辱。タイムは4分38秒、5年は遅れること10秒、3年はさらに遅れること15秒(距離が100m程度に伸びたようだ)。一時は意気阻喪していた4年生応援団は、にわかに色めき立って「4年万歳!」の声が響き渡った。(明治43年1月発行『進修』第13号)

とにかく、ボートレースに関する記事は『進修』によく登場する。第15号(明治45年4月発行)では「...こしは端艇建造五周年の記念をも兼ねて、例年よりは、一層盛大に挙行しようといふ目論見だ。...選手擥猛烈な練習は更にも言はず、各級次回またそれぞれ応援歌の練習に声打ち唄しての意気ごみだ。当日、火花は既に暁の空に轟いた。軽雲の徂徠も徐に収まるやうだ。人はみな川口さして急いで行く。...観覧の人は夥しく寄せて来た。

来賓席の賑ひは言ひまでも無い!」(抜粋)と盛り上がりぶりをつつる。

第25号(昭和2年1月発行)には、後に茨城大学学長を務めた市村正二氏(中30回卒)の課題選文が掲載されている。「二寸の間、沈黙が続いたかと思ふと、何時の間にか、三隻のボートがまのあたりを息もつかずに走り過ぐ。『一、二、一、二』かれた聲を出して調子をとる舵手それに合はせて水に入る。亦が一番だ...なに言だ、ホラそこだ、しかり。決勝線は近づくと、緑のラストハウイが利いたのか、今一問と離れぬ決勝線前線は赤を追ひこして心地よく線にすべり込んだ。『ドン』と何とも云えぬ底力ある様な言砲で緑は一着の栄を得た」(抜粋)と、ゴールの決定的な場面を活写する。

こうして霞ヶ浦をひかえた土浦中学ならではの水上運動会は、生徒を熱狂させる行事となり、近郷近在から多くの観客を集め、県知事も来臨するような一大イベントになっていった。勝負にこだわる余り、上級生と下級生の間にトラブルを生じたが、生徒たちは休日を利用して、遠漕を試みるなど、前号で書いた幸津校長の端艇建造の意図どおり、心身を鍛え、浩然の気を養っていったに違いない。

30年近く続くも幕を下ろす時が...

大正12(1923)年の関東大震災の時も「ボートは蘇生した何といふ幸福なことである」(主生徒祝せ)海国男子の血は躍る...と、喜びを爆発させて乗り越え、明治・大正・昭和にわたり開催されてきた水上運動会。それもついに幕を下ろす時がくる。昭和10(1935)年を最後とし、河口の護岸工事により、艇庫を失ったためである。同時に端艇部も廃部となったのだ。(了)

余録 追憶 永山正(元本校教諭・大正14年〜昭和40年在職)

ボートレースは、秋の陸上運動会とならんで春の最大の行事で5月の日曜日に催された。霞ヶ浦をもつ土浦中学校としては、最もふさわしくカッコよい若者の祭典で、土浦の名物でもあった。特に祭典といったのは、競技に参加する者は陸上とは違って少なく、大部分の生徒は応援団だからだ。レースは今の土浦港の岸壁で行われ、艇はさくら・つくば・かすみの三隻だった。各対抗(ボート部除く)、クラブ対抗、地域対抗(通学区でその頃、会が組織されていた。例えば桜川以南の桜南会、石岡の南城クラブとか)。私は南城クラブの顧問だった)そして最後に学年対抗レースがあり、その応援合戦は華やかで物すごかった。学年対抗で5年生が敗れるようなことになると、事は容易ではなく、学年担任にとっては、いずれにしても頭痛の種であった。昭和13年プールの完成によってボート部も廃止になってしまったのは残念な気がする(補足艇庫がなくなり端艇はやむなく手放すことになる。そのため端艇購入積立金をプール建設資金にあてた)。若さを発散するシンボルみたいなだったから。あの頃の艇庫あたりには、霞ヶ浦観光ホテルなどが出現し、レースの行われたコースも立派な岸壁となり、突端にはハイカラなレトロロッジの建物が現れ、付近は野球場、陸上競技場、庭球コートなどのスポーツ施設ができ、湖上にはボートに代わってヨットが霞ヶ浦の花になってしまった。50年の歲月の経過を物語っている。(『進修百年』より)



現在の川口(土浦港)。左側の建物はホテルCANKOH(旧霞ヶ浦観光ホテル、今は震災で営業休止中)。その右隣の木立は川口運動公園(上)。川口運動公園正門(下)

平成24年10月2日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

←
阿見町掛馬付近からの霞ヶ浦。対岸は土浦の市街地。その先には筑波連山と筑波山。(平成24年8月撮影)



←
30分交代で漕ぎ進める霞ヶ浦周航(遠漕)参加者(大正11年秋)

土中生が最も血沸かせ肉躍らせたのはボートレース。一方で、心身を鍛練し自然豊かな風情を満喫できたのは、霞ヶ浦端艇(ボート)行・周航だった。「左手には連山依々所々に早くも紅葉を染めてうねり、筑波の秀峰がその上に黛を凝らしてボート行を見送るが如く、湖岸の葦は青翠滴るが如く、飛び交う五位鷺の群と静かに鳴くかいつぶりの声が旅情を誘う」(大正4年『進修』第18号)と湖上の“妙”を活写する。今号は悠揚たる端艇行・周航を取り上げてみたい。

端艇(ボート)の快(楽しさ)

前号で述べたように、春5月の水上運動会(ボートレース)に向けては、学年や学級ごとに猛練習を繰り広げ、当日はプライドをかけたレースが白熱を極めた。着順判定をめぐっては激しい抗議行動が起こる事態もあった。しかしレースが終われば、生徒達は霞ヶ浦の自然の魅力に惹かれ、湖上にボートを浮かべては意気揚々「端艇行」を堪能していた。

『進修』第26号(昭和2年9月発行)には、当時5年生だった桜井茂氏(中27回卒)の水上部記事が掲載されている。「春、桜花爛漫たる頃、落花紛々と散り敷く桜川に端艇を走らす時の快、青葉深き夏の日に油蟬の声より遠ざかり、遠くポプラの影を眺めながら湖心に艇を浮かべる時の快、秋筑波の翠峰美しく水に映り、水田は黄金の波を打たす頃、湖畔の葦を揺るがせながら艇を操る時の快、落莫たる冬の日に草も木も水も凍らんとする時オール響勇ましく汗ばむ程に力漕するの快、なにものか之にたとえる事ができよう」と四季折々の端艇の快(楽しさ)を綴り、高揚のあまり、それは何事にも例えようがないと言いつつ切っている。

霞ヶ浦の豊かな自然にふれる

また、土浦の保立本店社長だった保立俊一氏(中31回卒)は、著書『水郷つちうら回想』(筑波書林)の中で、ボートの思い出を次のように語っている。

「昭和初期まで、県立土浦中学校(土浦一高)にボート部があった。当時のボートは固定シックスという今のレースボートのようなスライディングシートなど

の無い幅の広い6人漕ぎのボートである。赤の「さくら」、緑の「つくば」、青の「かすみ」の3隻でお世辞にもスマートとはいえない艇であったが、それでも当時の中学生の胸の血をわかすには充分であった。春、3月ともなれば、学級対抗のボートレースに備えて練習が始まる。川岸の艇庫からトロッコに乗せて艇を水の上を下ろして、重いオールを引く。広い霞ヶ浦の中で単調な練習に飽きると、禁止されている桜川遠征を企てる。こども達は今も昔も同じ、禁止されている事をしたがるものだ。」



スケッチ「桜川遠征」(上、『水郷つちうら回想』の「開の桜川」より転載) (右、『霞ヶ浦の自然』の「かすみ」より転載)



「6月のボートレースが終わると、学校の許可をもらってよくボートを漕いだものだ。レース前はきつい練習が続けられたのだが、夏休み頃までは湖に遊びに出るためボートを出した。観光ホテル(現在のホテルCANOKO)の所に艇庫があり、トロッコに乗せてボートを川に下ろす。6人漕ぎの固定シックスという幅の広い重いボートだが結構楽しかった。水神宮の一本松、二本松、三本松が湖の中に立っていた。通運丸などの航路標識になっていた。前谷原の突端に二本松が

ある。川口川の出口である。そこから桜川の河口から直線の位置にあった三本松までは1km、遊びであつても此の区間は真剣に漕いだ。

夏の霞ヶ浦は下風である。東南の風が多い。二本松から三本松方向へ進むのは向かい風である。風の強い日は湖面に白波が立つ、浪のうねりも高くなる。そんな日10kmのコースは相つきが悪い。三本松まで行って小休止すると帰りは追い風である。オールを立てて帆の代わりにしてボートを流す。そんな時ボートの中で寝ながら聞くよしきりの声は最高である。広い前谷原の中のたくさんの合唱が湖の中心までひびく。涼しい風を受けてよしきりの声を聞きながらのんびりボートを流していると暑い夏の日も天国である。二本松の所から南へ一直線に桜川へ出る水路が谷原の中を走っていた。上級生が名づけてアンパン海峡の愛称で呼んでいた細い水路である。艇を進めて水路に入ると、ヨシの根が3、4mの深さの湖底までスキリ見える澄んだ水であり、ヨシの生えた池塘がフラフラ浮かんでいたり、谷原の中は浮世離れた別天地であった。カイツブリやバンなどの水鳥の巣もヨシに掛かっていたし水鳥の囀(さえずり)のほかに音の無い水路であった。私達は好んでこの水路を通つたものである。夏、水路は水草の花畑となる。オモダカ、オニバス、ホテイアオイ、コウホネ、ヒツジ草等、今では見られない種々の水草が、白黄紫とりどりの可憐な花をつけて澄んだ水面にひっそりと咲きみだれていた。」(要旨抜粋)

端艇を漕ぎつつ、肌で感じ取れる楽しさや格別の爽快感とともに、霞ヶ浦の自然の豊かさがひしひしと伝わってくる。



遊覧船がゆき、山を背に、波と帆掛け船が空を舞う（上、『霞ヶ浦写真館』より転載）
大の城炭録（右、『霞ヶ浦写真館』より転載）
正期『写真記録』より転載



霞ヶ浦周航（遠漕）のはじまり

日頃からボートに慣れ親しんでいれば、霞ヶ浦周航（遠漕）に挑もう、というのは当然の理（ことわり）。その試みは、本校校歌を作曲した尾崎楠馬先生（小紙22号で詳述）の一言で始まった。『進修』第13号（明治43（1910）年1月30日発行）の「鹿島遠漕記事（橋本芳雄（中9回卒）」には、その経緯・状況が丁寧に書き留められている。それを現代文風に整理して追ってみたい。

「明治42（1909）年8月7日、田村弁財天先で水泳練習が実施される。遠泳の試験も無事終わり、一同芝の上で休んでいると、『さて、いよいよ明日で水泳（練習）も終わる。ところで、一同遠漕は如何か』と、尾崎先生が発議。もちろん生徒たちが日頃から熱望していたことであり、たちまち『賛成々々』の叫び声。鹿島への遠漕が決まる。

8月9日、端艇『桜』に尾崎先生と生徒8名、『霞』には舟本氏と生徒8名が

乗り込み、午前6時、川口の艇庫を出発。田村弁財天、沖宿、沖宿から対岸の大山鼻へ。その後、難所と言われる三又沖を過ぎると、浮島が大きくなり、湖上には木原方面からの蒸気船や帆を張った高瀬船も行き交う。

牛堀を前に、一同湖に飛び込んで汗を流し、『桜』組は赤、『霞』組は青のユニフォームに着替え、10時過ぎに牛堀に上陸。子どもたちは、珍しげに駆け寄り、女たちは『此の暑さにまあ』と、驚き顔。生徒たちはすこぶる得意顔。昼食の弁当を平らげ、30分ほど休憩。飲料水を積んで、潮来へ向けて出発。潮来からは前川を経て北浦へ、ほどなく大舟津に到着。湖岸に面した新しい学校（補足、大舟津小学校か）にボートを着け、ボートの係留を依頼するも、小使の爺さん、頑固で全く話がわからず（あいにく校長以下教職員が研修のため留守であった）、役場まで行って許可を受ける始末。役場の職員に向いてもらって、やっと爺さんを納得させた後、徒歩で鹿島の町に向かう。宿泊は鹿島小学校を借用。部屋は小さな裁縫室、暑さ、蚊、蚤に閉口するも、尾崎先生が奏でるオルガンの一曲一節に癒されながら、生徒たちはいつの間にか眠りに落ちていった。

8月10日は、鹿島神宮に詣で、鹿島灘で海水浴。波の荒い鹿島灘。霞ヶ浦の波に慣れ親しんだ生徒たちは、当初は恐る恐るであったが、馴れるに従って、一日海水浴を満喫。

8月11日、目を醒ますと、空は曇り、強い風。これで帰れるかと少々心配に。しかし行けるところまで行こうと、午前7時30分、大舟津を出発。波が高く、飛沫が顔にかかる。北浦、前川、潮来を経

て、ようやく牛堀に到着。女たちは『この浪にまあ』と、驚きの声。なかの一人が『お前等、命が惜しくないなら行くがよからう』とまで言い放つ。これには生徒達たちが驚き顔。それでも牛堀では万事都合が悪いので、とにかく麻生まで行くことに。波は高く、前を行くボートの底部がみえるほど。必死にオールを漕ぎ続け、やつの思いで麻生に到着。『行くべきか、行かざるべきか』、議論が二手に分かれるも、暴風警報が出るにおよび、麻生に留まることに。帰省中の同級生のはからいで柏屋に宿泊。警察より電話で土浦に連絡してもらい、尾崎先生は校長に電報。校長よりの返電は『イソグナ、ジチヨウセヨ』。言、簡にして、意、深重。これよりしばらく『自重』の語が生徒たちに大いに流行。

翌日8月12日は雨も降らず、風もなし。一同は喜び勇んで麻生を出航。天王崎、浮島を越え、大山鼻を廻り、沖宿で小休止。田村弁財天で一泳ぎ、昼食をすませ、ボートの清掃。その後、木陰で茶話会（母校では心配をしていたと思うが、なんとものんびりとした話だ）。尾崎先生が当時、流行っていた歌をまねて、『シャブ、シャブ、シャブと漕ぎ来るは、土浦中学水上部の遠漕隊、色は真黒気で歯が白い、オール握ってバックをきかす、大舟津の頑固爺、鹿島の学校で蚊に喰われ、麻生の柏屋で菓子を食べる』。オールに合わせ一同でこの歌を歌いながら、午後4時、無事川口着、『水上部万歳！』を三唱して解散となった。

そして、最後に橋本氏は「金は要らず、自由で、しかも面白く、且つ勇気を増し、意志の鍛錬になった此の行も、無事これで終わりを結んだ」と記し擲筆している。

これ以後、後輩達も「山と立ちくる大波も 千尋の底の淵とても 慣れて我家に異ならず 嵐も強く吹かば吹け なんと恐れん海国男子」（『進修』第18号）と、意気高くして遠漕をたびたび試みていく。それらを仔細にした記事が『進修』誌上を飾っている。

- 『進修』第17号（大正3（1914）年2月発行）「鹿島遠漕記」5年稲葉三郎
- 『進修』第18号（大正4（1915）年3月発行）「香取遠漕記」4年菊地武
- 『進修』第22号（大正11（1922）年7月発行）「鹿島に向けて遠漕」
- 『進修』第23号（大正13（1924）年7月発行）「牛堀まで遠漕」

彷彿させる情感「琵琶湖周航の歌」

第三高等学校（現京都大学）の生徒であった小口太郎が、大正6（1917）年、琵琶湖一周の漕艇中に作詞したのが「琵琶湖周航の歌」（作曲は吉田千秋、三高寮歌。1971年に加藤登紀子がカバーし、ポピュラー音楽として一般に知られる）。海国男子の土中生も、その巻頭言の「風吹かば風吹くままに、波立たば波立つままに」の情感たつぷりに、行く手はるかに筑波の峰を仰ぎつつ、茫々たる湖上でオールを握っていたに違いない。



潮来市（旧牛堀町）永山から見た霞ヶ浦に沈む夕陽（上、平成24年5月撮影）
鹿島神宮拝殿（下、平成19年8月撮影）



←
富山県立南砺福野高校にある「巖浄閣」
(旧富山県立農学校本館・解体修理さ
れた国重文)。復元された正門には「富
山県立農学校」の門標が掲げられる

平成24年11月14日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



←
「巖浄閣」について、
説明を熱心に聴取す
るとともに、質問を
する視察団一行

今、ホットな話題と言えば、辰野金吾が設計した「東京駅赤煉瓦駅舎」復元完成。その東京駅より10年前の明治37年に竣工したわが旧本館は、辰野金吾の愛弟子駒杵勤治が設計。築後108年が経ち、壁のひび割れ、雨漏り、柱の腐朽など破損・損傷がかなり進み看過できない状況に。そこで、焦眉の急を要する抜本的改修に向けて、今年の文化財校舎視察は、根本修理がすでに終了している富山県立南砺福野高校を訪問。今号はこの視察模様を取り上げたい。

視察先は旧富山県立農学校本館

「早急に旧本館の抜本的改修を！」と
思いを定めた進修同窓会は、今年5月に
「旧本館校舎改修促進委員会」を発足さ
せ、関係方面への働きかけに本腰を入
れていく方針を確認し、走り出している。
改修工事については、平成15年に「10
年以内に根本修理が必要」との(財)文
化財建造物保存技術協会の調査結果を
受けて、平成17年2月に要望書を提出
しているが、現在に至るまで大きな進展
がないまま歳月を重ねてきている。こ
間に大震災もあり、壁のひび割れ、雨漏
り、柱の腐朽、窓枠の変形などの破損・
損傷は明らかに拡がっている。今般の発
足は、旧本館を預かる者として、この深
刻な事態を目の当たりにし、これ以上座
視することはできない、という強い責任
感と使命感の発露と言えなくもない。

こうした動きの渦中であって、今年の
文化財校舎視察は、議論百出の中から、
昨年と同じ、富山県南砺市の県立南砺福
野高校敷地内にある旧富山県立農学校
本館「巖浄閣」(小紙第39号で詳述)が
最も適当である、と意見が集約された。
この建物は、本校と同じく旧制中学校等
の校舎として平成9年に国より重要文
化財の指定を受け、すでに平成17年に
解体修理を完了させている。そのため、
直近の修理の実情やそれに至る同校の
取り組み、諸団体・諸機関との連携協力、
総工事費予算内訳・調達等について、つ
ぶさに状況を聴取できるとともに、保
存・管理運営に関する調査研究にも資す
る、と判断されたのだ。しかも、一泊二
日の日程で視察可能な地域でもあった。



「巖浄閣」の裏側、
手前は出入口(上)。
資料を収める本格的
陳列ケース(左)

平日の視察でも参加者は22名

視察団一行は、8月30日午前7時、
「旧本館の改修促進」の旗幟を鮮明にし、
本校玄関前より一路北陸道へと旅立っ
た。諸般の事情により、実施日が2日間
とも平日を余儀なくされ、視察を断念せ
ざるを得なかった人々がいる中で、参加
者は22名。特に「同窓会の総力をあげ
て！」の要請に呼応し、「少しでも力に
なれば」と、多方面から同窓会員の皆
様が駆けつけて来られた。さらに文化財
関係者と、学校側から武井秀一校長(高
23回卒)・杉山博副校長(高24回卒)に
も加わっていた。いずれにせよ、多
事多端な日々を過ごされている一人一
人が、万難を排してお越しくくださったの
だ。まさに厚意と温情に支えられて、今
年も実現した文化財視察なのだ。そして
互いに初対面であっても、「一河の流れ
を汲むも多生の縁」というように、本校
または旧本館に、ひとかたならぬ愛着や
親近感を寄せる真心がにじみ出て、すぐ
に言葉を交わし合う光景を現出させる。
バスが常磐道を走行する中、車中では
視察にあたっての挨拶が始まった。最初

に、幡谷浩史進修同窓会会長(高4回卒)
の代理として、大曾根宏亮副会長(高4
回卒)が視察の目的と多忙な中での参加
に感謝の言葉を述べた。次に数名の方々
からご挨拶をいただき、最後に、武井校
長が学校の現況等を報告し、セレモニー
はひとまず幕を閉じた。

車中に見る「修復工事記録」映像

30度を超える暑さに辟易しながらも
妙高SAで昼食をとり、その後、バスの
ディスプレイ画面には、昨年の訪問の際に
入手した「旧富山県立農学校修復工事記
録」のDVD映像が映し出された。そこ
には、「歴史と設計」「旧校舎の移築と思
い出」「保存運動と重要文化財指定」「解
体・調査・修復」と、4つテーマ(観念
が設けられ、修復工事の一部始終が40
分余りにわたり克明に記録されている。
特に「解体・調査・修復」では、朽ちて
ポロポロとなった部材が次々と解体さ
れていくシーンが画面全体に繰り広げ
られていたが、それこそ圧巻であった。
このDVD等を通して、現地に到着す
る前に、視察する建物の文化財的要素や
解体修理の概要については、一応把握で
きていたといつてよいのかもしれない。
その後、バスが北陸道に差しかかる頃
から一天掻き曇り、今にも泣きだしそう
な空模様となる。そして車窓に水滴が伝
い出している午後2時前頃に、視察先に
バスが近づくと、前方に桜色の木造2階
建て校舎が目飛び込んできた。威厳と
気品に満ちた佇まい、「巖浄閣」である。
建築面積は、本校旧本館のほぼ3分の1
の333・82㎡。修復工事費は3億7千百
万円かかったという国の重要文化財だ。

視察校における説明と質疑応答

雨の中、傘をさして出迎えてくださったのは、同校の同窓生であり、旧職員でもあった中島良夫・竹下宏子の両先生。さっそく、「巖浄閣」内の学習室に案内された。そこで、南砺福野高校の校長先生より歓迎の挨拶を賜るとともに、両先生による熱のこもった説明をうかがうことができた。以下、その内容で印象深かったところを列挙してみたい。

○ 復元の段階で、建物に悪影響を及ぼすとのことで、周囲の樹木は伐採した。

○ 校舎の色をグリーンか、桜色かで意見が分かれた。明治36年建築当初はグリーンであり「復原」という意味からすればグリーンだったが、最終的には、多くの同窓生にとっても馴染み深く、大正年間に塗り替えられた桜色に落ち着いた。

○ 工事は、県と国が半々で負担した。同窓会では、3千6百万円ほど募金を集めたと聞く。

○ 最近では、この建物で書道展や友禅染展を開催し、特に友禅染展の際には「友禅の魅力を語る」と題してギャラリー・トークも行った。

説明が終わると、質疑応答に移る。以下、これまたその一部を記してみる。

○ (質問) 復元を実現するために、学校としてどのような取り組みをしたのか。
(回答) 同窓会長がたまたまその当時の町長でお骨折りをいただいた。また後援会のトップには卒業生である某国会議員を据えることができ、うまく軌道に乗せられた。やはり政治力は大きい。また校長もかなり努力していたと思う。

○ (質問) 企画展はどんな方々が中心となって行っているのか。

(回答) 精力的に活動するのは少数のOB・OGだ。現職員は日々の教育活動が一杯で協力を望める状況にない。

○ (質問) 展示している貴重品はどのように管理しているのか。

(回答) 機械警備によってセキュリティが確保されている。

○ (質問) 文化財校舎を授業で活用することはあるのか。

(回答) 授業で連句の会を行っている。度まで整えているのか。

○ (質問) 照明及び空調の設備はどの程度まで整えているのか。
(回答) 照明設備は、復元の際に大幅に増強した。今日のような雨模様でも晴天の日とほぼ同じだ。空調はエアコンの冷房のみで暖房はついていない。

この後、館内の見学に移った。1階は学習室を除き、学校や建物の歴史に関する様々な資料が本格的陳列ケースに展示されている。2階は百人以上を収容できる講堂があり、ここが企画展や講演会の中心となっているという。そして予定の1時間半が過ぎ、巖浄閣を辞した。この頃には雨も上がり、薄日が射し始めた。

富山湾で見た「虹」と「蜃気楼」(?)

5時近くに宿泊の氷見温泉「永芳閣」に到着。富山大学人文学部副学部長大工原ちなみ氏(高27回卒)の推奨の宿だ。眼下に富山湾が広がり、遠くには立山連峰の山並みが霞んで見える。心癒される絶景は一幅の絵を見ているような気分になる。そして雨上がり、太陽が西に傾きかけるその時、北東の空に、くっきりとした七色の帯が眼に入った。富山湾に

架かる「虹の架け橋」だ。「虹を見て心が躍らなくなったら、死んだ方がましだ」と詠ったのは、イギリスの浪漫派詩人ワーズワース。大自然の最高の造作の妙に一行の誰もが心躍った。それどころか自然の摂理の粋な演出は、同時にもう一つあった。それは虹が海と接する所に、工場群らしき建物がゆらゆら揺れながら海面に浮かんで見える現象だ。これこそが当地によくでる「蜃気楼」のように思えた。(実はこれは早合点だった)

やがて、大工原教授もはせ参じてくれた懇親会が山田副会長(高15回卒)の司会のもとで始まる。大曾根副会長を皮切りに、様々な方々の力のこもったスピーチ、乾杯、自己紹介と続き、その後は談笑に花が咲く懇談の宴に移行。和やかな雰囲気の中、ひととき盛り上がる場面が発生する。それは「先ほど、蜃気楼のようなものが見えましたが、日本館全面改修は、蜃気楼で終わらせてはなりません」と、ある会員が語気を強めた時だ。これこそ、関係者全員の思いを率直に吐露したものにほかならなかったのだ。



「永芳閣」からの絶景。眼下に富山湾、遠くに立山連峰。さらに富山湾に架かる虹も瑞龍寺(右)と富山大学(左)の法堂(共に国宝)。

【余録】今年の日本館のテレビ放映

日本館は、本校のシンボルであり、同窓生の郷愁の場。更には言えは国の宝物でもある。荘厳な偉容と計り知れない造形の豊かさが見る人を魅了する。それゆえ今年も様々な場面で活用され登場した(する)。その一部を紹介したい。

○ テレビ BS朝日『建物遺産』(6月)

BS日テレ『知られざる百年遺産』(7月)

○ 映画 『天心』(12月) 小原流『挿花』24年3月号

○ 雑誌 『ストリートジャック』25年2月号

○ 同窓生 退職記念講義(5月) 茨城大学進修同窓会懇親会(11月)

瑞龍寺と魚津埋没林博物館も見学

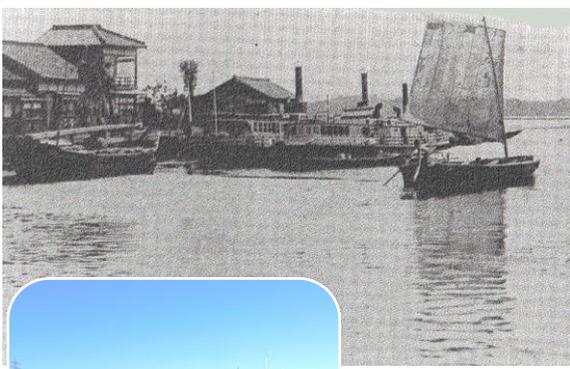
翌日は、「国宝「高岡山瑞龍寺」と特別天然記念物「魚津埋没林博物館」を見学。瑞龍寺は、加賀藩主前田利長公の菩提を弔うため、三代藩主利常が、寛文3(1663)年に建立した曹洞宗の寺院。博物館は、2000年前の杉の原生林が川の氾濫で埋もれ、その後海面の上昇により、海面下に埋没していたものを発掘・展示している。前日の巖浄閣に続き、これらの貴重な文化遺産・自然遺産にも直接目にふれることで、長い時間の流れを経てきた生きとし生ける森羅万象の息遣いを感じ取りるとともに、朽ち果ていくものを整備・保存していく貴さと大切さを痛感した。以上で視察を終え、午後1時過ぎには帰路につく。高速道路を走り続けて5時間余。土浦到着を間近にした車中では、視察事務担当の助川博士同窓会幹事(高21回卒)の進行で、複数の参加者から最後の挨拶をいただく。その中で「旧本館改修に向けた思いを、皆様と同様に私も共有できた。参加してよかった」との言葉が心を熱くした。そして午後7時前に土浦に無事降り立ち、解散となった。

平成24年12月11日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

←
大正期の土浦・川口港。古くから霞ヶ浦舟運の拠点であり、当時は帆をつけた高瀬船も航行していた（『むかしの写真土浦』より転載）

霞ヶ浦舟運（しゅううん）

旧制土浦中学生在が湖面にボートを浮かべていた明治から昭和の初めの頃まで、霞ヶ浦には、高瀬船や蒸気船が行き交い、物流における大きな役割を担っていました。歴史をさかのぼれば、江戸時代には、舟運が関東一円と江戸とを結び物流の大動脈であり、土浦と江戸（東京）を経済的に結びつけたのが高瀬船だったのです。今回は、霞ヶ浦舟運の歴史をたどってみます。



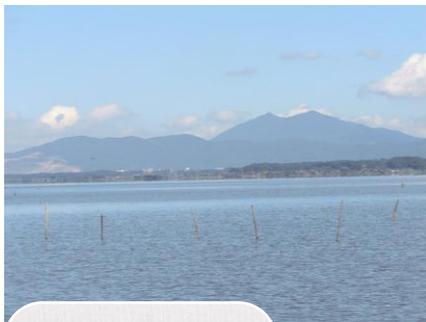
←
現在の川口港。超高速船ジェットホイールつくばが就航する

江戸に直結 土浦

霞ヶ浦、今から50年程前には、ワカサギ漁の帆掛け船が夏の風物詩になっていましたし、潮来や佐原行き定期船も運航されていました。（昭和40年入学の高校20回生の頃までは、この航路に就航していた「さつき丸」を利用して、鹿島神宮や香取神宮へ春の遠足ににかけていました）。江戸時代には高瀬船が江戸と土浦間を頻りに往復していました。実は今でも土浦から東京デイズニールランドや両国国技館まで船で行けるのです。霞ヶ浦と横利根川と利根川と江戸川とたどれば浦安に到達します。さらに行徳から船堀川（新川）、小名木川を進めば、江戸両国国技館に着きます（さらに隅田川を遡ればスカイツリーが目の前です）。このルート、江戸時代には物流の大動脈でした。江戸時代の交通は、人は陸の上を、物は水の上を、が大原則でした。関東地方の農村で生産された物資が船で運ばれ、百万都市の江戸を支えていました。江戸で消費される米、味噌、醤油、薪、炭などが、利根川や霞ヶ浦の沿岸から船で運ばれていました。江戸の人々の生活を支えていたのは関東地方の農村でした。逆に船によって、江戸文化とか、粋（いき）に代表される江戸っ子の流行なども関東地方の農村に広がっていききました。

古来、利根川は太平洋ではなく、東京湾に注いでおり、江戸はたびたび水害に見舞われていました。江戸に幕府を開いた徳川家康は、江戸を水害から守り、新田開発の推進、舟運の開拓、東北と関東との交通・輸送体系を確立することを目的に、河川改修事業を命じました。関東

の各河川を江戸につながるようにしたのです。現在の道路網整備と同じと考えて下さい。この河川改修事業の最たるものが、利根川東遷（とうせん）東へ移すこと）事業でした。関東郡代（かんとうぐんだい）関東地方の幕府領を支配する代官）伊奈忠次（ただつぐ）、忠治（ただはる）親子により東遷事業が完成すると、1665年、霞ヶ浦・銚子から利根川・関宿・江戸川を経由し、江戸へと至る水運の大動脈が完成。奥州（東北地方）からきた物資も那珂湊から溜沼に入り、途中、陸送を経て、小川や銚田を通って霞ヶ浦や北浦へ入り、江戸に送られました。（動力のない、風力と手こぎの船では黒潮と親潮がぶつかる海域を乗り切るのはほとんど不可能でした）。



木原港から仰ぐ紫峰筑波（上）。かつての本校生が遠足に利用した「さつき丸」（左、「大利根博物館」より転載）

霞ヶ浦の土浦・高浜・木原・麻生、利根川筋の佐原・木下・守谷・境、鬼怒川筋では水海道・石下・宗道・結城など、各河川筋に河岸（かし）川の港町）が開かれ、水運とともに栄えました。また土浦・野田・銚子の醤油、石岡・石下・佐原の酒、流山の味噌（みりん）、猿島のお茶などの産業も発達しました。

土浦には、川口川の川口河岸（現在の

「モール505（付近）」と手野河岸の二つの河岸がありました。当時の河岸は現在の鉄道の駅と同じです。駅に電車が着くように河岸には高瀬船が着きました。駅の周辺にいろいろなお店があるように、河岸にも河岸問屋（運送業者）荷物の受け渡し、送り状の発送、手数料の徴収、旅人の乗船斡旋などを業務としていました）があったり、食堂・酒場・旅館などが軒を並べていました。

「河岸を変える」という言葉、飲む店や場所を変える時に使いますが、どの河岸にも居酒屋などの飲み屋がかならずあったので、このような言葉が生まれたのだと思います。

土浦から江戸両国まで、船に乗れば、一歩も歩くことなく行けたのですから、今で言えば土浦は鉄道や高速道路で江戸に直結しているようなものでした。江戸中期の俳人、与謝蕪村（1716〜1784）は20才代の後半から約10年、結城の地に滞在し、「行く春や むらさきささむる 筑波山」などの句を遺していますが、これは結城の町に水運で財をなした後援者がいたためです。



葛飾北斎の『富岳三十六景・常州牛堀』（上）。夕焼けに映える筑波山と霞ヶ浦（右、『霞ヶ浦写真館』より転載）



高瀬船

霞ヶ浦や利根川を行き交ったのが高瀬船。高瀬船は河川専用建造された帆船で、森鷗外の小説「高瀬舟」には「高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟」と記されていますが、高瀬川固有の舟ではなく、様々な型や大きさの高瀬船が全国で使用されていました。

利根川の高瀬船は、京都のような小舟ではなく、大型の川船で、船の長さは最大のもので30mほどのものもあり、一度に100俵程度の米を積むことができました。当時の利根川は流域各地と大消費地江戸とを往来する高瀬船で賑わい、大きな帆に風を受けながら航行する高瀬船は、葛飾北斎の「富岳三十六景・常州牛堀」など、数多くの浮世絵（錦絵）に描かれています。また江戸天保時代の土浦の俳人、内田野帆（うちだやはん）は、土浦八景（はっけい）ある地域における八つの優れた風景を選ぶ、風景評価の様式。10世紀に北宋で選ばれた瀟湘八景がモデルとなり、日本では近江八景が最初の例とされています）の句を詠みましたが、そのなかで高瀬船が行き交う様子を「帰る帆に向かふて出すや涼み舟」（川口帰帆）と詠んでいます。

高瀬船には小さな船で2〜3人、大きな船だと6〜7人が乗り組んでいました。女性が乗船するようになったのは、明治の末期頃からです。

土浦から霞ヶ浦、利根川、江戸川を経由して江戸まで行くのに1週間、早ければ3日で着きました。早いと運賃を割り増しして貰えましたが、いくらなんでも一日では行けませんので、その間、食事

も寝泊まりも舟の上でした。そのため高瀬船には「セイジ」と呼ばれる船員が寝泊まりする部屋が設けられていました。夜は航行できないので河岸に停泊していましたが、明治に入ると高瀬船を改造した「湯船（風呂と座敷を備えた船の銭湯）」も作られるようになり、乗組員に重宝がられていました。



大正期に霞ヶ浦をゆく高瀬船（上）と高瀬船を改造した湯船（右）
（上、土浦市立博物館より）
（右、利根川博物館より）

土浦河岸からは醤油（当時の超ブランド商品でした）や年貢として集まってきた米が出荷されました。それに対して手野河岸からは薪炭、材木などが出荷されています。田村や沖宿の台地にあった雑木林から採れた木材です。面白いのは白が出荷されていることです。昔は冠婚葬祭、何かあれば必ず餅をつきました。そのため白は各家庭の必需品でした。手野河岸から大量の白が江戸に送られています。江戸の餅を霞ヶ浦沿岸の雑木林が支えていたのです。

通運丸

明治時代に入ると西洋の技術が導入され、1872（明治5）年に「陸蒸気」（おなじょうき＝蒸気機関車）が走り始めまし

たが、利根川水運では、その1年前の1871（明治4）年に蒸気船が就航しています（東京〜古河間に就航した「利根川丸」）。1877（明治10）年には外輪蒸気船「通運丸」が登場しました（昭和初期までに約60隻の通運丸が就航しています）。全長22m前後で、船体の両側面につけた水車を回転させて航行しました。

1890（明治23）年には日本初の西洋式運河である利根運河が開通、利根川と江戸川を短絡し（柏市〜流山市〜野田市）、銚子と東京の間を約18時間で結びました（土浦出身で、国学者色川三中の甥の色川誠一もこの運河の建設に尽力しています）。1921（大正10）年には横利根川に横利根閘門（こうもん）水位の異なる河川や運河、水路の間で船を上下させるための装置）も完成しています。

通運丸を運行したのは内国通運株式会社（現日本通運）で、土浦にも1890（明治23）年に蒸気船が就航していますが、1896（明治29）年に常磐線の土浦〜田端間が開通（東京まで2時間）すると、さすがに東京まで蒸気船に乗って行く人はいなくなつたようです。しかし、1910（明治43）年4月4日発行の「利根川汽船航路案内」（編集者 汽船荷客取扱人聯合会）には、内国通運汽船が当時運航していた11航路と寄航場、さらにその周辺の名所旧跡案内が掲載されています。

土浦発着の汽船としては、1日に「鹿島行往復2回（1918（大正7）年の時刻表では土浦鹿島間は約五時間かかっています）、佐原行往復2回、銚子行往復1回、江戸崎行往復1回、又東京、鉾田、高濱、水海道、野田、境、古河、笹良橋（栃木県）、川俣（群馬県）等へ接続輸送の便

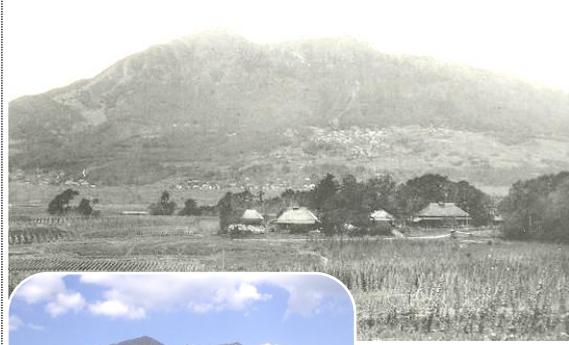
あり」との記載があり、水運による貨客輸送がまだまだ盛んであった様子がうかがえます。また高瀬船も、蒸気船に比べると天候に左右され、時間もかかりましたが、運賃がとても安いために昭和初期まで運航されていました。



明治期〜昭和初期にかけて霞ヶ浦舟運の主役を担った「通運丸」（上、より図説川の上の近代）
大正期の利根川水系航路図（左、「20世紀時刻表歴史館」より）

現在、国内の物流の主役は自動車になっています。通運丸を運行した日本通運もトラック輸送が主流です。しかし、貿易の担い手はやはり船。エネルギー効率が一番よく、一度にたくさん、遠くまでモノを運ぶことができます。授業で「船は世界を結んでいる」と答えてくれた生徒さんがいましたが、水運の本質を見抜いた答でした。船・自動車・鉄道・飛行機が現代の物流を支えています。物流が止まれば、人々の生活が止まります。あまり目立ちませんが、人々の生活を支える大切な仕事の一つです。（高21回松井泰寿記）

参考文献「江戸時代の霞ヶ浦」（土浦市立博物館 木塚久仁子著）。霞ヶ浦舟運をはじめ、土浦の歴史を詳しく知りたい人は、亀城公園にある土浦市立博物館を訪ねてください。



←
現在の筑波山。右峰が女体山(877m)、左峰が男体山(871m)。中腹の「筑波山神社」周辺にはホテルなどが立ち並んでいます

←
関八州の重鎮「筑波山」全景(戦前)。麓にはゆったりと時間が流れ、のどかな草葺き屋根の農村風景が広がっています(『ポケットブックス アンティーク絵葉書専門店』より転載)

平成25年1月15日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

筑波の山のいや高く

「沃野一望数百里 関八州の重鎮としてそそり立ちたり筑波山」と、土浦中学校時代から、生徒達によって高らかに歌われ続けてきた筑波山。そればかりでなく、朝な夕なに真鍋台の校舎から仰ぎ見る筑波山は格別な存在であり、これに挑みたくなるのは、ある意味でごく自然なこと。今号は、浩然の気を養うべく、たびたび行われてきた筑波登山行について取り上げてみます。

筑波に挑む土浦中学校生

旧制土浦中学校では、開校3年目の明治32(1899)年から修学旅行が始まり、一・二年生は筑波登山(1泊2日)。三年生は1日目が石岡・岩間から笠間へ(泊)。2日目は笠間から水戸線で岩瀬まで乗車。さらに岩瀬から雨引山、加波山を縦走し、筑波山で一・二年生と合流(泊)。翌日、3学年そろって大曾根、一の矢を経て帰校しています。

翌明治33(1900)年には、それぞれ5泊6日の行程で、四年生が鎌倉・横須賀方面、三年生は日光方面。二年生は霞ヶ浦周回で、これは土浦から汽船で行方井上寄航場まで行き、麻生(泊)、潮来、鹿島(泊)、香取、佐原(泊)、佐倉、成田(泊)、印旛沼、龍ヶ崎(泊)、女化を経て、牛久から汽車で四年生と合流し土浦に戻っています。一年生は筑波山・水戸方面で4泊5日。筑波、真壁、笠間、大洗に宿泊しています。

5学年がそろった明治34(1901)年は、五年生が松島・仙台、四年生が鎌倉・横須賀、三年生が日光、二年生が鹿島・成田、一年生が筑波・大洗となっています。こうして筑波登山は一年生修学旅行のお決まりのコースになっていきました。一方で汽車や船の便がない区間はすべて徒歩。4泊5日または5泊6日の日程はかなりの強行軍であったと思われれます。

ところで、余りにも身近で、多くの人々を魅了し、万葉の代から歌にも詠まれてきた筑波山には、土中生は修学旅行だけでなく、個人やグループでもしばしば訪れていました。明治31(1898)年の夏休みには、先生と二年生3名が筑波町の個人宅を借り受け、約半月間、植物採集を行

っています(『進修』第1号・明治33(1900)年発行)。その後、「修学旅行記」、「筑波山に遊ぶ記」、「筑波山の初日の出」等々、多数の作品が『進修』誌上を飾っています。そのなかで、高田保(大正2(1913)年卒・中12回)が、三年生の時に寄稿した「筑波登山」(『進修』第14号・明治44(1911)年3月発行)は、出色の出来栄で、後年の筆の冴えをうかがわせる作品となっています。ここでは保の筆をたよりに、筑波登山の様子をたどってみます。



荘厳な筑波山神社拝殿(上)。かつては石段の路がここから始まっていた一の鳥居(左)

「筑波登山」

三年 高田保

「秋が来た。三年生の修学旅行方面は、日光前橋と定まったさうだ。足尾から大間々まで12里、しかも崎嶇(きく)たる山路を突破せねばならぬのだ。

『男だよ。歩けなくてどうする!』

力んでは見たが、さて、関東平野に産聲(うぶこゑ)あげて、山と云(い)や筑波の紫を仰ぐより外、何んにも知らぬ連中のこと、内心聊(いささ)か心細き感ありといふわけで、先ず足試しとして筑波山神に詣(も)うづるの計畫(けいかく)が起(お)こった。勿論(もちろん)、僕

等のことだ。平凡な宿屋の厄介になるようなり旅行じゃない。頂上に泊まるんだ。五軒茶屋で夜を明かそうといふのだ。」
「破天荒(てんぱくわう)、人は許さぬかも知らぬが、僕は自ら許して、破天荒の快挙といふ。いや頑張る。が然し、時節柄(ときせがら)南極探検の向ふを張るかと同達(どうたつ)えられては、清まぬから取り下げようか。」



1715年に建立され、1798年に再建された北条の「つくば道」道標(上)。神郡集落を貫通する「つくば道」(右)

明治43(1910)年10月8日土曜日、真鍋台の北(吟吉)先生のお宅に三年生19名、二年生1名が集合。北先生、西尾(頼造)先生の引率のもと、一行は高岡、藤沢を経て、午後5時、北條尋常小学校に到着。茶湯を戴き、持参の弁当で腹ごしらえを済ますと、北条から神郡(かんごおり)を抜けて一の鳥居に至る、古来からの登山道をたどっていきます。

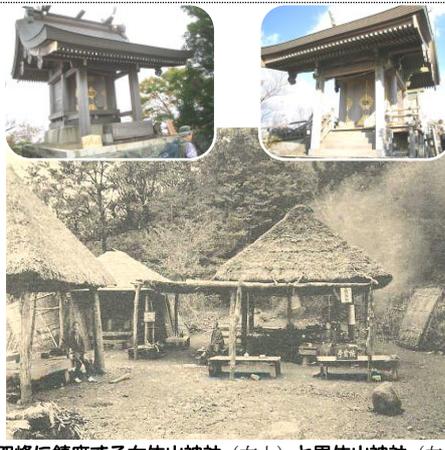
「提灯(ていとう)を振り翳(かざ)して筑波に向ふ。軍歌(ぐんか)の聲(こゑ)張り上げて元気のよいこと、田井(たゐ)、神郡(かみぐん)の村々は、子供等(こどもら)があたふた飛び出して眺(なが)めてる。」

一の鳥居から石段続きの路を一気に駆け上がる筑波の町。外交上手の北先生が交渉の結果、五軒茶屋の主人父子が同行してくれるとのこと。筑波山神社の社

殿に額（ぬか）づき、山に入ると吹き上げる風が強くなるも、一行はすこぶる元氣。

「箱根の山、進め矢玉のやれ何の歌かの歌から、果てはぐるぐるまいたほうに至るまで、喉（のど）も裂け、山も崩れよ計（しきり）に怒鳴って行く。山怪（さんかい）山に住む妖怪（えんま）もうみ・水に住む妖怪（みづま）も魂消（たまげ）たろう。」

『オーイ』
歌の絶え間には前者後者相呼び相應じて、深い深い闇から闇へ、山響（やまびこ）を傳へるのだ。」



双峰に鎮座する女体山神社（右上）と男体山神社（左上）。その間の御幸ヶ原に、かつてはあった五軒茶屋（下、『ポケットブックス アンティーク絵葉書専門店』より転載）

男女川（みなのがわ）で新しい草鞋（わらじ）にはきかえ、胸突八丁を上りつめると、五軒茶屋（現在のケーブルカー・筑波山頂駅がある平坦地は、男体山・女体山の二神が御幸（往来）する「御幸ヶ原」とよばれ、かつてここには、依雲亭・迎客亭・遊仙亭・向月亭・放眼亭の5つの茶屋があり、夫婦餅と田楽豆腐を販売していました）。腰を下ろした時は10時近く。掛け茶屋の爐（ろ）を囲んで爺さん（五軒茶屋依雲亭主人）の咄（はなし）に耳を傾けているうちに、山頂の夜は雨と風とに更けていき、爐邊（ろへん）の団らんも一人二人と欠けていきました。

翌朝になると、「眼が覚めたのは4時近く。吹くは吹くは、降るは降るは。横擲（よこなぐ）りに熊笹の圍（かこい）を打ったたくのは雨。天の吼（さけ）び、地のどよめき。山の飛ばぬが勿怪（もつけ）の幸い。」

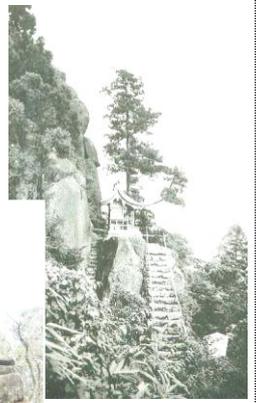
暴風雨のような悪天候。しかし、夜が明けると、風雨は多少収まり、周囲は雲の中。

「夜が明けたか外が白い。扉を推して見ると、アツ白い海！ 白い海！ 雲が飛ぶどころじゃない。一面はただ見る、雲の海！ 雲の乾坤（けんこん）。」

爺さんが、焼いてくれた夫婦餅を空きつ腹におさめて、先ず男体山、雲ただ漠々（ばくばく）。一行は離れ小島に取り残されたロビンソンクルーソーのおもむき。ついで女体山に向かう。頂上にたどり着くと、そこも雲の中。

「海の中か、地の底か、天の一隅か。混沌（こんとん）たる閑閑（かひやく）以前の世のさまか。巖頭（がんとう）がんとうに巖立（ざりこ）して、静かにこの雄大極まる漢々の偉親絶親に對した心こそ、於戯（あめ）これ真に吾我の眞境であつた。『辨（べん）ぜんと欲してすでに言を忘る』。陶淵明は千年も前に、我等の刹那（せつな）の心情をいふた。實際、何といつて宜（よ）いか判らなかつた。

好畫圖（こうがず）！ けれども神に非ずして誰かこれを描くべき靈管（れいかん）靈妙なる筆（ふで）を有（も）つて居ようぞ。繪（え）や畫（が）い。矢張、大自然だ。藝術を超越した絶対的の力を有する景色だ。人間の智慧や、細工や、理窟（りくつ）や、是等の何を以てしても、冷やかき科学の力では、此の中に包まれた神秘の扉を開くことが出来ないだろう。況んや。戀（こい）を致（いた）ひ人生の倦怠（けんたい）をいふ文士に於いてをやだ。」
一行20有余人は、恍（こう）として一言も発せず、大自然と一つになつていました。しばらくの後、一行は大声一声、



現在の高天原。北先生が逆立ちをしたのは、この中央にある巨岩の上なのではないか



→ かつての高天原（『ポケットブックス アンティーク絵葉書専門店』より転載）

山神の靈に別れを告げて、下山の途に。途中巨岩が屹立（きつりつ）する高天原へは、北先生が真つ先に登られ、その頂きのてっぺんで逆立ちをやつてのけられました。弁慶七戻り（べんけいしちもどり）を過ぎ、10時に近い頃、一行は塚田屋という宿屋の2階にくつろぎ、朝飯を済ませて、11時半にその宿を出立。北条、小田、藤沢と疲れた足を引きずつて、八坂神社の森陰に、校舎の高い塔を見たときには、ほつと一安心。振り返ると、筑波の紫は、一行を見送りながら、高く蒼穹（そうきゆう）を摩（ま）してそびえていました。



弁慶七戻り（「石門」）。豪傑の弁慶でさえも、頭上の岩が落ちてくるのでは、と、7度も後ずさりしたといわれる。「名所スポット」

そして保は最後に、「以上は僕等の筑波行の概略だ。ただ、廻（まわ）らぬ筆の、楽しくも亦豪壮（ごうそう）だつた其の時の状の、百分の一をも寫（うつ）し得ぬのを憾（うら）みとする。」と総括（くわつ）し、

「五軒茶屋に寝た晩は實際愉快だつた。僕等大いに浩然の氣を養うべき必要あるものは、時にこんな事を企てるのは最も宜（よ）いことと思ふ。」

僕等は遂に成功したのだ。此の拙（つた）い文の中からもこの一行の意氣といふものを汲んで貰へれば大いに本望だ。」と結んでいきます。（ふりがな・注は、筆者補筆）

現在は「歩く会」へ

その後、五年生の修学旅行が大正4（1915）年から箱根方面で、そして大正11（1922）年からは京阪神方面で実施されるようになると、それに併せて四年生以下が筑波登山をするようになりました。しかし、京阪神方面への修学旅行が、昭和15（1940）年の「聖地巡拝旅行」で最後となり、修学旅行そのものが、昭和16（1941）年の「香取・鹿島方面剛健自転車旅行」で最後となると、筑波登山も行われなくなりました。

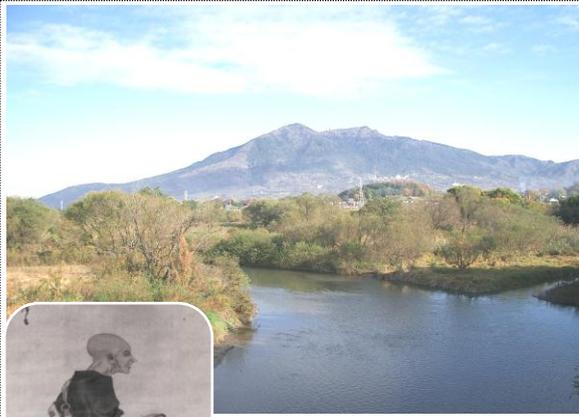
戦後、土浦一高が発足すると、昭和24（1949）年に校内マラソン大会（第1回は本校へ藤沢八坂神社間往復、後には様々な区間）が始まり（昭和43年まで）、昭和44（1969）年からは「歩く会」（第1回は筑波風返峠から本校まで）に衣替えされて、現在まで続いています。今も生徒達は、諸先輩方同様に、筑波の峰を仰ぎ、健脚を競っています。（高21回卒松井泰寿）

余録 映画「天心」ロケが本校日本館で

岡倉天心を描く映画「天心」（主演竹中直人）ロケが、昨年12月に旧本館玄関前（文部省美術展会の入退場シーン）と市内「霞月楼」（宴会場シーン）で行われました。ここにはエキストラとして、本校関係者及びそのご家族あわせて24名の皆様方に出演協力を賜りました。ありがとうございました。上映開始予定は今年9月。

平成25年2月12日

茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
HP <http://www.sin-syu.jp/>



筑波山を「むらさきの山」と表現。その美しさを讃えた服部嵐雪の肖像画(『おのごろ嶋雑記』より転載)

← 紫峰「筑波山」と、その心もとを流れ、世阿弥の謡曲『桜川』の舞台ともなった「桜川」(撮影：平成15年11月、つくば市巡見橋)

むらさきの筑波山

冬の訪れとともに、筑波山がよりはっきり見えるようになりました。冬に限らず、光の具合によっては山肌が紫色に見え、「紫峰」の名もうなずける気がします。筑波山、日本百名山のなかでは最も標高(877m)が低いにもかかわらず、古くから「東の筑波、西の富士」と並び称されてきました。

筑波の道

筑波山、双峰(そうほう)・ふたつの峰の神秘的で優美な姿は、古来多くの人々を魅了(みりょう)してきました。『万葉集』には筑波山を詠んだ長歌・短歌が25首載せられています。万葉人が心のよりどころとした大和三山(香具山なまみ 畝傍山うねみま 耳成山みみなり)のどれよりも多いのです。その後、古今和歌集、後選和歌集、新古今和歌集と歌に詠まれ続けてきました(小倉百人一首でお馴染みの陽成院(ようせいいん)の歌、「筑波嶺の嶺より落つる男女川(みなのがわ) こひぞつもりて淵となりぬる」は後選和歌集に載せられています。また室町時代に最盛期を迎えた連歌(れんが)は、二人(以上)の人間が和歌の上の句と下の句をつないでいく詩の一種で「筑波の道」ともいわれますが、それは、その起源を『古事記』にある、筑波山を詠みこんだ、倭建命(やまとたけのみこと)日本武尊(やまとむすね)と御火烧翁(みよたきのおきな)との唱和問答歌(しょうわもんどうか)とすることによります。その問答歌は、倭建命が東征の帰り道、甲斐(山梨県)酒折宮(さかおりのみや)にお着きになった時、「新治(にひびり)筑波を過ぎて 幾夜か寝つる(東征の旅に出て、もう常陸の新治・筑波を過ぎて 幾夜寝たのだらうか)」と歌われたところ、御火烧翁が「日日並(かがな)べて 夜には九夜(ここのよ) 日には十日(とをむ)を(何日も経て、夜では九夜、日では十日を過ぎてこられました)」と、お答えしたものです。筑波山の中腹にある「筑波山梅林」(つくば市沼田)の駐車場脇に「連歌発祥之地」と書かれた歌碑とその説明板が並んで建っています。

鹿島紀行

江戸時代には連歌から俳諧(はいかい)が生まれ、松尾芭蕉(1644〜1694年)が蕉風と



「連歌発祥之地」歌碑(上)。男体山社殿のすぐ下に「日本武尊凱旋之御遺跡」の木札。この巨岩の地が連歌岳なのでしょうか(右、昭和13年頃、『昭和からの贈りもの』より転載)

呼ばれる芸術性の極めて高い句風を確立し、俳聖と呼ばれました。その芭蕉は1687(貞享4)年の秋に鹿島を訪れ、「鹿島紀行(鹿島詣)」を残しています。弟子の河合曾良と僧宗波を伴った芭蕉は、鹿島を目指し、深川芭蕉庵の門前から舟に乗り、小名木川、新川を東進、江戸川に入って、行徳で下船。行徳からは徒歩、八幡の里を過ぎて、鎌谷が原(鎌ヶ谷)という広い野原にでると、はるかかなたに筑波山が見渡せます。その様子を芭蕉は、「秦句(しげん) 秦の都咸陽の地、ここでは広々としているさま)の千里とかや、目もはるかに見わたさる。筑波山むかふに高く、二峰並び立り。かの唐土(もろこし)に双剣(そうけん)のみねありと聞えしは、廬山(ろさん)の一隅なり。」と詠(なぐめ)しは、我門人嵐雪(らんせつ)が句なり。すべて此山は日本武尊のことばをつたへて、連歌する人のはじめにも名付たり。和歌なくばあるべからず、句なくば過ぐべからず。まことに愛すべき山の姿なりけらし。」と記しています。服部嵐雪(1654〜1707年)別号の一つが雪中庵(ちゆうちん)は、芭蕉の高弟の一人で、芭蕉から「草庵に桃桜あり。門人に其角(きかく)宝井其角)嵐雪あり」と称えられています。芭蕉が、目も遙かな秋空に見渡される双峰、筑波の山を眺める芭蕉の胸中に去来した

のが、この「むらさきの筑波」という嵐雪の一句でした。芭蕉の心に浮かんだこの一句は、やがて嵐雪の代表句として世に伝わっていききました。この句は、「雪の筑波山の景色もいいが、晴れた紫の筑波山の景色はさらにいい」と解釈されていますが、宮本宣一氏(中19回卒)は『筑波歴史散歩』(斎書房)のなかで、当時「雪」をもって富士山の代名詞とし、「紫」をもって筑波山の代名詞とするようになり、「雪の富士山よりも紫の筑波山の方がよい眺めだ」との解釈をしています。

江戸時代中期の俳人、与謝蕪村(1716〜1784)は、1742(寛保2)年から約10年間、下総国結城(茨城県結城市)に滞在し、嵐雪の句を踏まえて「ゆく春やむらさきさむる筑波山」と詠んでいます。どうやらこの頃から「むらさき」が筑波山の別称となっていたようです。



東京深川の芭蕉記念館に建つ松尾芭蕉像(上)、与謝蕪村の肖像画(下、『蕪村頭影俳句大学』より転載)



その後、芭蕉一行は鎌ヶ谷から布佐までは徒歩でたどり、布佐からは再び舟で鹿島まで行き、「月くまなくはれけるまに、夜ふねさし下して、鹿島に至る」、芭蕉の参禅の師であった仏頂禅師が閑居しておられた根本寺に滞在しています。

「一の鳥居」の句碑の拓影
「雪八末う左須万川 武良左
幾能筑波山 雪中庵嵐雪
(雪はまうさすま むらさ
きの筑波山 雪中庵嵐雪)」
(右、正面から見た句碑上)



嵐雪句碑

嵐雪の代表句とされた「雪は申さずまぶらさきのつくば哉」の句碑が、高田保たちが登った登山道（高田保の筑波登山記は小紙53号で紹介）、一の鳥居の傍らに建っています。表には「雪は申さずまず紫の筑波山 雪中庵嵐雪」、側面には「是より山上」の五文字が大きく記されています。1782（天明2）年10月13日、ちようど嵐雪の命日、供養の営みとして、この碑が建立されたようです。建立者は杉野翠兄（すぎのすいけい）1754〜1813 杉野治兵衛。翠兄は江戸時代中期・後期の俳人。竜ヶ崎の地主で油屋を営むかたわら、嵐雪の高弟大島（雪中庵）蓼太（りょうた）1718〜1787の門に学び、小林一茶とも交流がありました。翠兄は筑波庵と号して、近隣に多くの門人を持つ活躍し、常南地方に俳諧を広めていきました。碑の裏面には「古叟嵐雪此山頭に紫の一字を得たるは芙蓉峰の雪にむかふておもておこせし言の葉なるをや。爾比磨利菟玖波（ににまり）くばのしげき陰にこゝの代十代も朽せざれと深きこゝろを石にこめて管立せるものは杉野翠兄。是をよみし是をしるすものは雪中庵蓼太」と刻まれています。（この句碑には「むらさきの筑波山」と刻まれています。が、芭蕉は『鹿島紀行』で「むらさきのつくば哉」と紹介しています。嵐雪の発句集『玄峰集』には「紫の筑波山」と出ていることから、本校第14代校長の長南俊雄先生（中21回卒）（『杉野翠兄―竜ヶ崎の俳諧師―』・崙書房）や石塚弥左衛門氏（『山は筑波嶺―文人群像―』・STEP）は、芭蕉の思い違ひによるものと述べています）

も少なくなりりましたが、神郡から一の鳥居のある臼井を抜けていくこの登山道は万葉人も利用していたかもしれせん。718（養老3）年頃、常陸国の役人であった高橋虫麻呂（たかはしのむまろ）生没年不詳）は筑波山に登り、筑波山の歌をいくつか詠んでいます。万葉学者の犬養孝先生は、虫麻呂は国衙があった石岡から恋瀬川沿いに志筑・月岡・須釜を経て十三塚から風返し峠を越えて筑波に登ったと想定しています（犬養孝『万葉の旅』中・平凡社）。しかし、常陸国筑波郡の郡衙（郡役所）が平沢に置かれていたこと、『常陸風土記』に記載されている飯名神社が臼井に祀られていることを考えれば、佐谷、東城寺付近を通り、平沢に至り、神郡から臼井を抜けて山頂を目指したこともあったのではないのでしょうか。

「筑波山に登る歌一首ならびに短歌（『万葉集』巻9雑歌の部）―高橋虫麻呂 草まくら 採の憂（うれ）を慰（なぐさ）もる 事もありやと 筑波嶺に 登りて見れば尾花ちる 師付（しす）の 田井に雁がねも 寒く来鳴きぬ 新治の 鳥羽の淡海（あふ）も 秋風に 白波立ちぬ 筑波嶺の よけくを見れば 長きけに思ひ積み来し 憂は息（な）みぬ

反歌
筑波嶺の裾廻（すそい）の 田井に秋田刈る 妹（いも）がり遣（や）らむ黄葉（もみぢ）手折（てを）らな

江戸時代になると、筑波山が江戸城の鬼門にあたることから、782（延暦元）年に徳一上人が創建したとされる知足院中禅寺が祈願所に定められ、三代将軍徳川家光により大伽藍（現在の筑波山神社付近）にありましたが、明治の廃仏毀釈で大御堂を残すのみとなってしまいました）が造営され、神郡からの登山道も整備されました。そのため、この道は多数の参詣客でにぎわうようになり、翠兄たちがこの登山道脇にこの句碑を建立したのも

追記

茨城県立歴史館特別展「筑波山」開催
2月9日（土）から3月20日（木）まで、水戸市の茨城県立歴史館にて特別展「筑波山―神と仏の御座（おゝ）す山―」が開催されています。担当は永井博氏（高29回卒）・大関武氏（高35回卒）らです。

むらさき

筑波山の「むらさき」を醤油のブランド名にしたのが、土浦の国分勘兵衛の「大國屋」です。江戸時代、土浦は、銚子・野田と並ぶ醤油の名産地でした。江戸時代後期の国学者である中山信名（なかやまのぶな）1787〜1836）や色川三三（いろがわのぶ）1801〜1855）により編纂された『新編常陸国誌』土産の部には、「土浦にて大國屋というものの製するを上品とす。印に亀甲の内に大の字を書く故に亀甲大と称す。江戸にても上品とす……下総の銚子、佐原よりも出れども、土浦の亀甲大に及ぶものなし」とあり、上質の大豆と小麦を原料とした土浦産醤油の質の良さを述べています。



文久元年「關東造醤油屋番付」。力士とは別格扱いで、行司には色川三郎兵衛、その下の差添には、大國屋勘兵衛の名が見えます（『史料で探る茨城の歴史』より転載）

銚子では1616（元和2）年、野田では1624（寛永元）年に醤油醸造が始まっています。が、土浦では、1712（正徳2）年に、伊勢松阪の商人であった4代国分勘兵衛が城下の田宿町（現大手町）に醸造場を設け、醤油造りを開始したのが始まりであると言われています。当時の土浦藩主は

土屋政直で、領内の産業振興に努め、醤油造りを奨励したため、業者の数も次第に増えて、1761（宝暦11）年には9軒、1866（慶応2）年には19軒なっています。その代表格が大國屋勘兵衛と色川三郎兵衛で、両者とも江戸城西の丸へ醤油を納めて（徳川幕府御用達）土浦醤油の名を高めていきました。特に大國屋の醤油は美味で、大國屋の「大」を土浦亀城の亀甲六角の枠にはめた「亀甲大」印の醤油は非常に評判となり、なかでも「むらさき」という銘柄の醤油は、極上の酒よりも高価で売られたといひ、後に醤油の代名詞のように使われました。今でも料亭や寿司屋で醤油のことを「むらさき」とか「おひたち（常陸）」と呼ぶのは、ひとえに土浦産醤油の評判によるものです。（高21回卒 松井泰寿

余録 現在の「大國屋」と土浦醤油



東京日本橋にある国分本社と、亀甲大の商標柴沼醤油と、その商標（上）（下）

大國屋は明治維新を迎えると、醤油醸造業を他に譲り、広く食品販売を業とする問屋に転向しました。1888（明治21）年にはビール販売を手がけ、1908（明治41）年には「K&K」印（国分と勘兵衛の頭文字をとってつけています）を商標とし、さらに1909（明治42）年には味の素、1919（大正8）年にはカルピスの発売を開始するなど、たえず時代を先取りし、発展してきました。現在、江戸店のあった日本橋1丁目1番地に本社を構え、社名も「国分株式会社」と改め、日本一の総合食品商社として、創業300周年を迎えました。松阪市射沢町には、今も亀甲大の商標のある五つの蔵を有する國分邸が、江戸時代の豪商「大國屋」の面影をしのばせています。土浦では、市内虫掛の柴沼醤油が唯一土浦醤油の伝統を受け継いでいます。



←
筑波山を背に、田植えを終えたばかりの田園地帯を快走する筑波鉄道「キハ504」。1986(昭和61)年5月(長津博樹氏(高38回卒)『常陸野鉄道写真館』より転載)

→
朝の通勤通学でにぎわう筑波鉄道「真壁駅」。1969(昭和44)年4月(鈴木道信氏(高21回卒)提供)



筑波線(上)

1918(大正7)年4月17日から1987(昭和62)年3月31日までの70年間、紫の筑波山を仰ぎ見ながら、その山麓をのんびりと走っていた筑波線。沿線住民の通勤・通学の足として長く親しまれてきました。

今号と次号とで筑波線の歴史と旧制土浦中学生、土浦一高生たちの筑波線への思いを綴ってみます。

筑波鉄道 1918(大正7)年

筑波線は、筑波鉄道株式会社が水戸線岩瀬駅と常磐線土浦駅を結んで、1918(大正7)年に開業した40.1Kmの鉄道路線で、開業当時の愛称は「マツチ箱」。常磐線の汽車に比べると比較にならないほど小さな蒸気機関車が、「マツチ箱」のような木造客車を数輛連結して、時折「ピーッ」とけたたましい汽笛を鳴らしては、「ゴットン」と喘ぎ喘ぎ走っていました。当時県内には旧制中学校の数が少なかったため、土浦周辺の町村から、常磐線や筑波線を利用して、汽車通学をしている生徒も多数見られました。そのなかで、昭和初期の筑波線の通学生はほとんどが小田以北の生徒で、総勢40名位。下級生は上級生に敬意を表して、別段ラブルなどもなかったようです。後ろの車輻には土浦高女(現土浦二高)生が乗っていました。当時のことから、お互いに言葉交わすようなことはありえません(自然と女性専用車が出ていました)。まだ新土浦駅はなく、土中生や土浦高女生は真鍋駅で乗降して、朝夕の真鍋駅は通学生でにぎわっていました。しかし、運転本数が極めて少なく、学校に着いてから始業時間まで一時間以上も待たねばなりません。下校の時には、乗り遅れないように真鍋の坂を駆け下りることがたびたびでしたが、大声で呼びかけると、真鍋駅を停車しようとしている汽車の機関士が、心当たりに発車を遅らせて待っていてくれました。

毎日一緒に通学する生徒たちは、朝夕必ず顔を合わせるので、1年生も5年生もすぐに親しくなり、牛久方面からの常磐線下り利用者、石岡方面からの上り利用者、筑波線利用者が、それぞれ懇親会を年に1、2回催していました。学校の教室を借りて、駄菓子をかじって、流行歌などを唱っていました(殿塚増男氏(中25回卒)「むかしの汽車通学」同窓会報第31号・昭和58年刊)。



開通して間もない大正期の筑波線(上、『写真記録茨城の20世紀』真鍋駅構内で、広瀬晃一氏(中33回卒)らの筑波線通学者卒業記念写真。後方は9号機関車。1934(昭和9)年2月(左)

大津国三氏(中30回卒)は、筑波線通学を「こうして一緒に通学したのは、同期では筑波駅から青木、大越、杉山、北条駅から市村、茂在、それから故人となつた宮本、山口、石井の諸君と小田駅からの私の9名であったが、勉強・スポーツの語り合いに、和気あいあいたるものであった。朝夕の登下校が常に一緒なので、余計親しみを深めた」と記しています(『筑波線沿線今昔(中学30回卒業50周年記念誌)』昭和56年刊)。

実はこの筑波線、当時の土中生は、通学者だけでなく誰もが年に1回は利用していました。それは小紙53号で記した4年生以下による筑波登山(5年生の修学旅行にあわせて、1915(大正4)年から始まりました)。その様子を保立俊一氏(中31回卒)は次のように記しています。

「昭和2(1927)年土中(現土浦一高)に入学した。土中の春の遠足は1年生から4年生まで毎年筑波山まで歩くことであつた。朝6時に真鍋台の学校を出発する。ゲートルを巻き弁当と水筒をぶら下げただけの姿で行進が始まる。4年生の吹く行進ラップで1年生を先頭に元気よく行進した。ラップに合わせて砂利道をふむ靴の音がきれいにそろって楽に行進することが出来た。

藤沢村の入口の坂で小休止。ラップの音も此処まで、藤沢、小田と集落の間は広い田圃の中のデコボコな土の道を通る。北条の町に入る頃は少し疲れて列も乱れ勝ち、町の中程から旧つくば道に入り、神郡の部落で小休止。その先は自由行動で筑波登山になる。4、5人のグループを作り、山を登る。ケープルカーのわき道を上り、中の茶屋、男女の川の茶屋で休み、男体、女体の山頂を通って下山にかかる。神社に着く頃はかなり疲れ、道のわきの清水にのどをうるおし、流れの中の沢蟹を捕ったり、登山道脇の湿地の野花菖蒲の群落の中を通ったりして筑波駅にたどり着く、筑波から汽車に乗って帰った」(『水郷つちうら回想』筑波線廃止)

当時の筑波線の乗車料金は、小田・真鍋間往復で50銭位、半年定期学割で25円位であつたようです(大津国三氏、前掲書)。その頃の職人の手間賃が1円位でしたから、かなりの高額でした。そのため保立俊一氏が、土中の筑波山遠足で筑波線に乗ったのは、幼稚園の時に母に連れられて泉の観音様へお参りに行った時以来だと回想しているように、通学以外に利用する生徒は減多になつたようです。



上野駅からの直通快速「つくば」。旅情たっぷりにのどかな筑波山麓を行きます(上)。「田土部」駅を通過する「つくば」(左)。いずれも1984(昭和59)年9月(両方とも、鈴木道信氏(高21回卒)提供)

常総筑波鉄道筑波線

1945 (昭和20)年



1918年に開業した筑波鉄道は、1945(昭和20)年に常総鉄道(現在の関東鉄道常総線)と合併して常総筑波鉄道となり、戦後混乱期の交通輸送を支えていました。戦後まもなくの頃は他の交通機関がなく、朝夕の通勤通学時には、満員の乗客で、上木幹夫氏(高4回卒)によれば、朝の虫掛駅では「土浦行」に乗りできないほどの混雑ぶりであった。戦後は気動車(ディーゼルカー)も走りはじめましたが、蒸気機関車が牽引する列車も運行していました。この列車、客車と貨車の混合列車で、朝の混雑時には貨車にまで乗客を乗せていました。当時、土浦一高、二高、霞ヶ浦高、土浦市立高(現土浦三高)、土浦第一高等女学校(現つくば国際大学高)などに通う高校生や、都内の大学へ通う大学生たちが利用していましたが、「貨車に女子は乗せられん」との義侠心でしようか、貨車には男子生徒が乗り、雨の日でも傘をさして乗車した生徒もいたようです。この混合列車、昼間の時間

帯は完全に貨物優先。藤沢駅、小田駅、北条駅などで貨車の入れ換え作業をしていたので、その間客車は放っておかれませんでした(そのため土浦駅から筑波駅まで、普通の倍近い2時間ほどかかっています)。本数もせいぜい1時間に1本程度、そのため通学生たちは、すぐ親しくなり、先輩から試験の情報(かなりの確率で当たっていたようで、毎年同じ試験問題で済ませていた先生もいたようです)を手に入れたり、勉強の仕方を教わったりしていました。教科書の20頁ごとにタバコを1本ずつ挟んでおくと、それを楽しみに勉強がはかどるといった不届きな勉強法を教える先輩もいたようですが、試験が終わると鍋焼きをご馳走してくれたりして、のんびりした通学風景であったようです(飯村弘氏談、高5回卒)。

常総筑波鉄道は、1960年頃が最盛期で、常磐線土浦駅から筑波山登山口の筑波駅まで急行列車が走り、春秋の行楽シーズンには、上野駅からは常磐線土浦駅経由で快速「つくば」が、日立駅からは水戸線岩瀬駅経由で「つくば山」が運行され、筑波駅まで乗り入れていました。のちに12系客車6連(たまに14系の時もあった)になりましたが、当初は旧型客車で、土浦まではEF80やEF81が、筑波線内はDD501(1954(昭和29)年新三菱重工製。センターキヤブのロッド式ディーゼル機関車)が牽引していました。

関東鉄道筑波線 1965(昭和40)年

1965(昭和40)年、常総筑波鉄道と鹿島参宮鉄道(鉾田線、竜ヶ崎線)が対等合併をして関東鉄道が生まれました。関東鉄道は、筑波線、鉾田線(石岡〜鉾田)、常総線(取手〜下館)、竜ヶ崎線(佐貫

〜竜ヶ崎)の4つの路線を合わせると、保有路線すべてが非電化の鉄道会社としては、日本最長のキロ数(123.1km)を有していました。また非電化のため保有車輛のすべてが気動車(ディーゼルカー)で、廃止あるいは電化された鉄道会社の車輛が次々と入線してきました。そのため鉄道車輛マニアの間では「西の江若(鉄道)、東の関鉄」と言われ、ディーゼル王国として知られていました。

鴻巣茂氏(高21回卒)は、その筑波線の思い出を次のように記しています。

「高校時代(1966(昭和41)年4月〜1969(昭和44)年3月)は、3年間筑波線で通学。同線を利用して同級生は全浴線で50名近くいたと思う。旧筑波町平沢の自宅から常陸北条駅まで自転車で行き、そこから筑波線の気動車に乗車。新土浦駅で下車し、学校までは真鍋坂を徒歩で登っていた。自宅から学校までは1時間余。当時はまだ「車社会」突入前であり、通勤・通学で混み合う時間帯があった。それを避けて、同じ北条中(現筑波東中)出身の大塚芳郎君と一緒に1本早い列車で行こう、という約束していた。そのため必ず座ることができ、その時間を予習時間にあてたり、理系の大家君に数学や理科を教えてもらったりしていた。

一方で、車窓から眺める四季折々の豊かな風情には、いつも心が癒されていた。4月は小田駅・北条駅の満開の桜が、5月は藤沢駅の紫の藤花が、特に印象に残っている。また、虫掛駅付近の一面の蓮田は、地元の筑波山麓にはなく、よく見入っていた。蓮根が緑の葉を徐々に成長させ、花を咲かせたと思えば、実をつけ、収穫されていく。その光景の一つ一つに、季節の変化と自然の妙を実感していた。

筑波線で、もう一つ忘れられないのが、春闘でのストライキである。朝は通常通

り運転されていたものの、帰りはストライキで全面運休になってしまった。このときは、たった一人で筑波街道を、革靴を履き、重いカバンを抱え、3時間余かけてひたすら歩いて帰った。さすがに疲れ切ったことを覚えている」と、感慨深く振り返っています。

車窓から自然のうつろいも感じられる筑波線、1970年代に入るとモーターライゼーションの進行など、世のうつろいには抗しきれず、乗客の減少が続き、経営が厳しくなりました。そのため、関東鉄道は1979(昭和54)年に筑波線と鉾田線を、それぞれ筑波鉄道と鹿島鉄道に分社化し、鉄道部門では常総線と竜ヶ崎線のみを営業を行うようになり、現在に至っています。(高21回卒松井泰寿)

〇御礼 第三展示室の衝立台座が、桜井光孝氏(本会本部幹事・定4回卒)のご厚意により、2月23日に設置されました。同氏は、今までも「資料陳列」「棟札展示」の諸種ケース、「玄関靴入れ」等を同様に作製して下さっており、心より感謝します。

〇文化講座 復元教室で4月13日(土)午後2時〜4時 ナチス収容所の感動物語「テレンジンの子どもたち」が開催されます。講師は林幸子氏(高14回卒)。資料代は300円(高校生以下は無料)。ぜひご参加を。

「新土浦駅」東口(土浦駅側)。この改札口を多くの土浦一高生が利用していました。1987(昭和62)年3月(右上、『なべ蔵奨励会』より転載)

桜花爛漫の「常陸小田駅」。1987(昭和62)年4月(左上、『鉄分100%〜壁面鉄道建設記〜』より転載)



「新土浦駅」東口(土浦駅側)。この改札口を多くの土浦一高生が利用していました。1987(昭和62)年3月(右上、『なべ蔵奨励会』より転載)



桜花爛漫の「常陸小田駅」。1987(昭和62)年4月(左上、『鉄分100%〜壁面鉄道建設記〜』より転載)